

日本福音ルーテル教会 百年史論集 第6号

特集 信徒運動の歴史

戦後の日本福音ルーテル教会の信徒運動・宝珠山幸郎

女性信徒の動員——婦人会連盟・山県順子

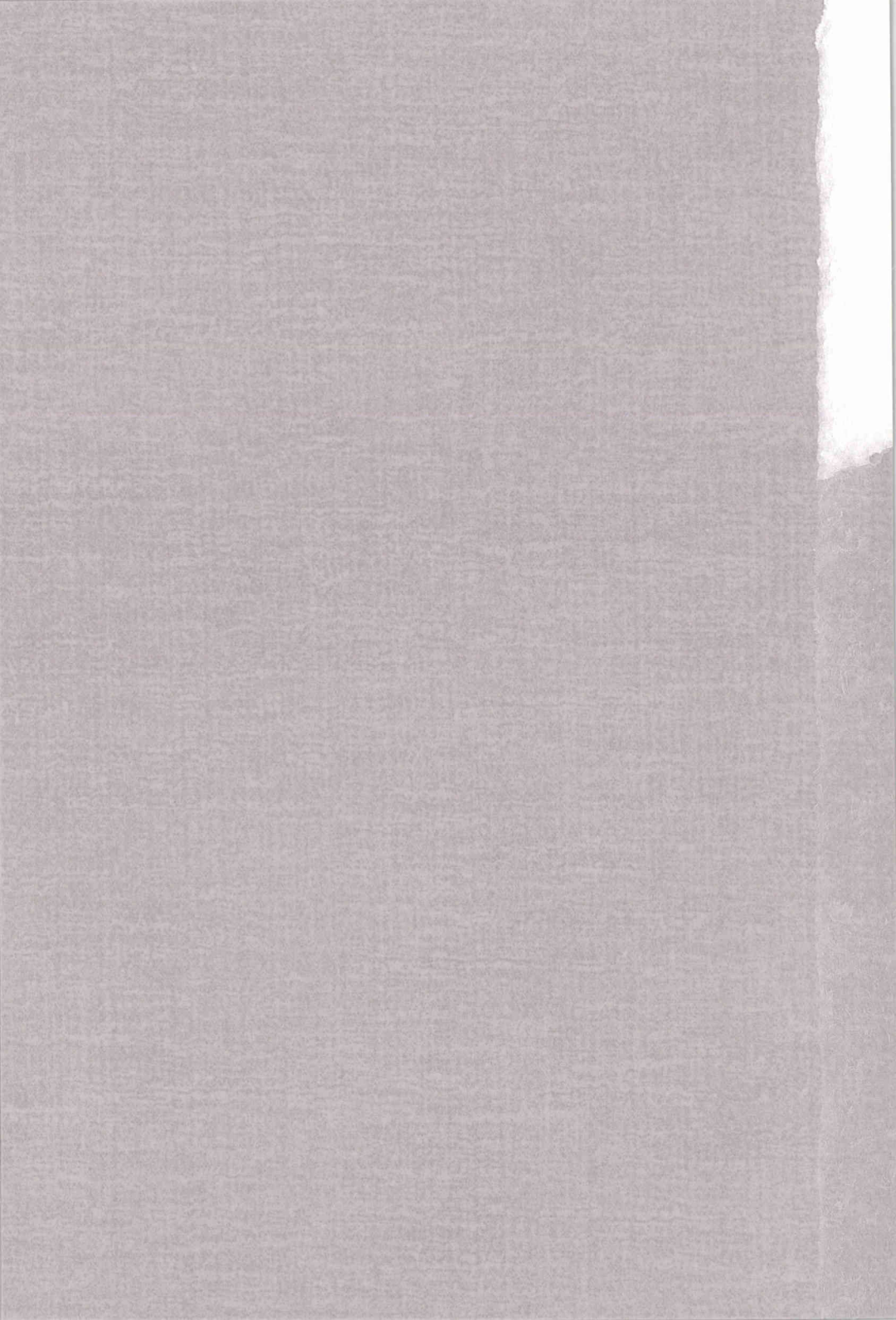
東海教区の信徒の動きと教区形成・山本 裕

《エッセイ》研究余滴三題・坂井信生

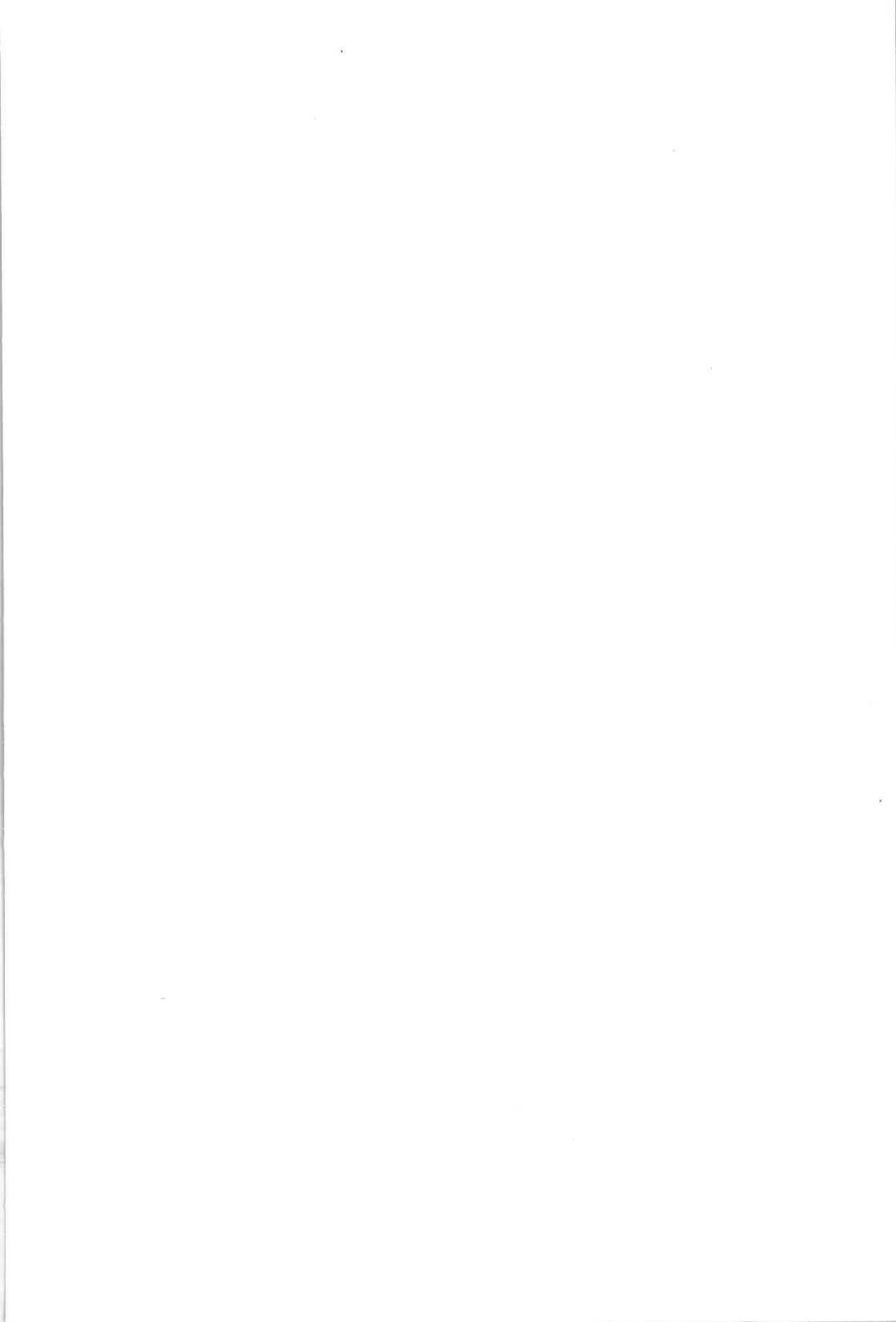
ルーテル教会に対する三つの感謝・加藤亮一

牧師と歩んだ軌跡・間垣和恵

百年史委員会



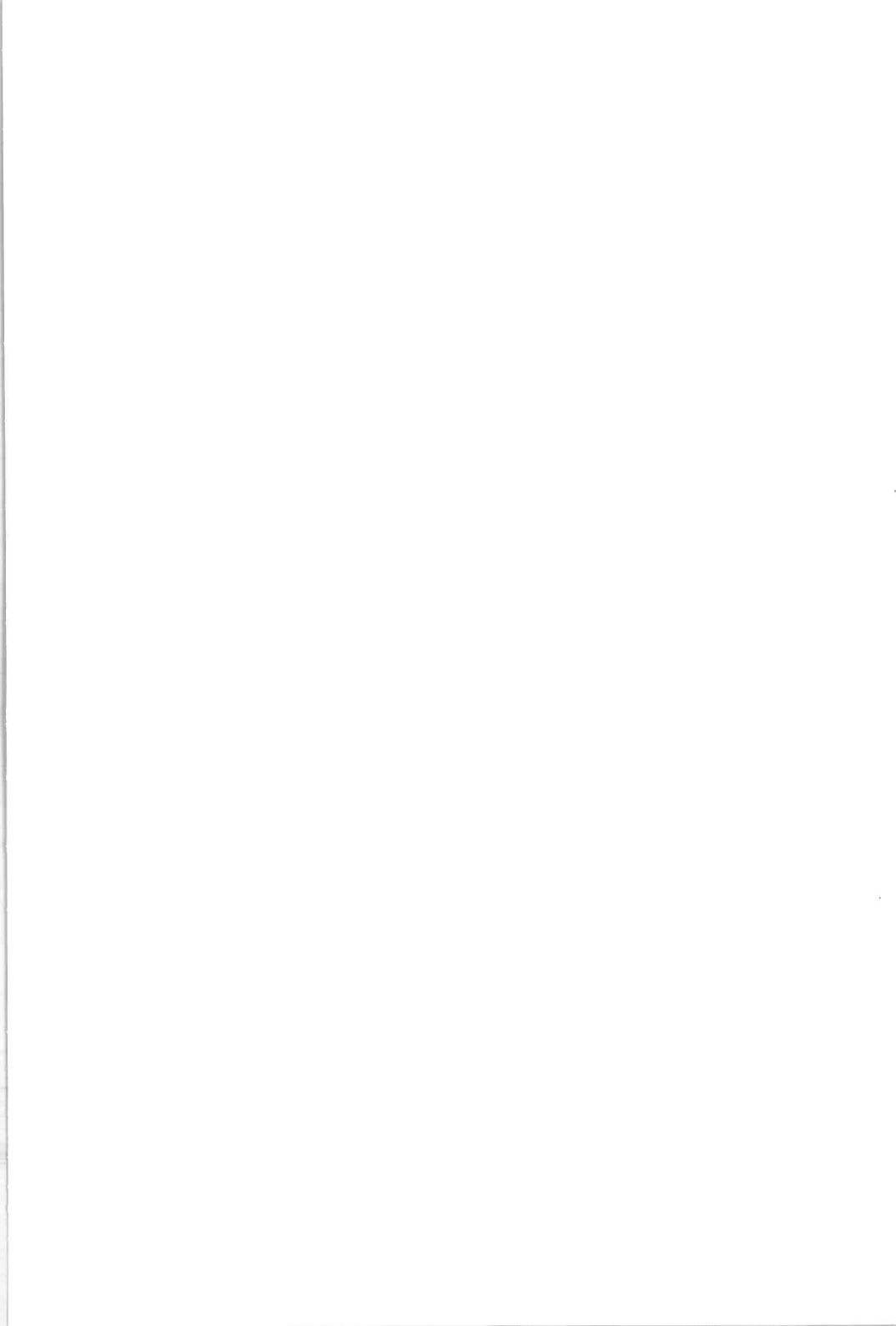
日本福音ルーテル教会
百年史論集 第六号



目次

特集 信徒運動の歴史

戦後の日本福音ルーテル教会の信徒運動	宝珠山幸郎	五
女性信徒の動員―婦人会連盟	山県順子	一四
東海教区の信徒の働きと教区形成	山本 裕	三七
《エッセイ》研究余滴三題	坂井信生	六一
ルーテル教会に対する三つの感謝	加藤亮一	七一
牧師と歩んだ軌跡	間垣和恵	七三
あとがき	徳善義和	七六



戦後の日本福音ルーテル教会の信徒運動

宝珠山 幸郎

まず初めに断わらねばならないことは、ここで言う「信徒運動」とは、信徒会、信徒組織また草の根的運動体としての、広義の信徒運動の歴史を意味する。また扱う対象としては、別に発題される「婦人会連盟」には触れず、また恐らく教育の分野で扱われるであろう教会学校及びその教師会組織については特に触れない。従って、主に青年層と壮年層、また年齢層を特に限定しない信徒運動一般の歴史を扱うものである。

主な焦点は、戦後つまり一九四五年以後であるが、最初にその前史ともいうべき戦前と戦中を瞥見すると、一九二一年（大正一五年）第一回信徒懇談会が博多で開かれ、当時は九州を主に教会が存在していた事情から、佐賀地区その他の九州の各所で地区懇談会が開かれ、名古屋、東京へと順次開催されてゆく。この集まりは組織というよりも、修養会的性格のもの、また交わりが主であったと考えられる。

一九四〇年（昭和一五年）には、「我々の教会は我々の手で」の標句のもとに「伝道奉仕会」が設立され、「五年以内の自給独立宣言」がなされており、海外諸教会からの財政的期待が難しくなった当時がうかがわれる。なお教会の財政的自給の声は早くより内外から聞かれ、一九二五年（大正一四年）、宣教師会から「教会完全自給」の要請がなされ、同年に開かれた「第一回信徒大会」ではその事柄が議せられたことであろう。教会の歴史から見れば、最初の自給教会「久留米教会」（一九二五年、昭和四年）が発足、「自給促進決議」（一九三四年、昭和九年）、「教会自給十ヶ年計画設定。連立自給制発足」（一九三五年、昭和十年）と続く。

「青年連盟」組織が結成されたのは一九三二年（昭和七年）である。

〈本論〉

一九四九年（昭和二十四年）、ルーテル青年連盟創立総会が京都に於いて開催される。因みに、そこに見出される指導層の青年の名を記すと、町野、田辺、池宮、角野、大石（泰）、江藤（安）。容易に理解されるように、以前もまた以後も青年連盟の活動の歴史からは、多くの教職に加えて、教会内の有力な信徒指導者が輩出されたことは明記さるべきである。連盟機関紙が独自に発行されると共に、教会機関紙「るうてる」には青年欄が毎号設けられ（翌一九五〇年）、連盟の目標は、「青年層への福音の徹底」であり、ルーテル教会の信条書、ルターの諸著作が活発に読まれた。当時は日本のキリスト教会に多数が押し寄せるピーク時（昭和二五、二六年）であり、多くの青年を捉え得た時期であった。第一〇回青年連盟総会（於京都、一九六〇年）へと定期的な開催は続く。

他の年齢層―壮年を主とした信徒運動は、九州を中心として現今に至るまで営々と地域的には開催されてはいるが、青年連盟に比肩する定期的、また全国的なものは見られない。しかしながら教会への参集者の急激な増加の時期には、職業的な信徒の集まりは随時なされた。例えば、第二回西日本農村信徒大会（一九五三年、昭和二八年）には講師として賀川豊彦氏の名が見られる。（因に第一回は、一九四八年、昭和二三年）。

一九五五年（昭和三十年）、各地区（部会）の信徒協議会、修養会、大会を経て、「壮年信徒育成のための会」が神戸にて開かれた。目標は、組織の強化・自給振起・伝道網の強化・五ヶ年計画であった。石田末吉、井上三郎、池永春生、浦上成生、和田秀穂、藤原哲夫、磯部幸一、三宅秀雄、上杉岩雄、川瀬清、柴田鐘平の各氏の名がそこに記されている。

翌一九五六年（昭和三十一年）、「第一回全国信徒運動協議会」が京都に於いて開催。標句は「一致と前進」。この標

句はこの年の青年連盟総会も同じである。この標句が選ばれた裏には、この時期に惹起した所の教会行政指導教職者たちの失敗の事実があったことも切り離すことは出来ないであろう。またこの標句には教会の財政的自給にとどまらない所の「伝道運動体」としての信徒運動の自己理解がある。そのことは多くの議論を経て、信徒運動の教会行政的な管轄責任は、教育局（部）ではなく、伝道局（部）のもとにあることを再三確認して来た歴史が存在している。

一九五七年（昭和三二年）、「キリスト教世界大会」が東京で開かれた。このことを付記して、多くのまた熱心な信徒が、営々とした教会学校のわざに奉仕して来た歴史を感謝を以て憶えるものである。

一九五八年（昭和三三年）、第三回信徒運動協議会が、広島の可部福音荘でなされた。「内的充実と自給」の主題のもとに、①自給と奉仕、②教会より委託された事業の推進、③交わりと一致などが協議された。信徒会から神学校卒業生として教会に赴く新教職にガウンの贈呈が行われ始めたのはこの頃である。

一九五九年（昭和三四年）、米国のアメリカ・ルーテル教会よりエンドレス博士が来日し、日本の教会の信徒を対象にしたスチュワードシップの振起に当たった。スチュワードシップとは本来、教会への財務的貢献にとどまらず、伝道・奉仕の一般の意味を持つ言葉であるが、主に財務的な献財精神の振起が目標とされたようである。当時は未だ現在のように日本は富裕期を迎えておらず、金額としては米国教会に遥かに及ばないものではあったが、教会員ひとりあたりの収入に対する割合としては、相当なパーセントを捧げていたことを改めて自他共に認識する機会となり、後述するところの教会の自給・自立へと向かう下地となった時期であった。

一九六二年（昭和三七年）、第七回全国信徒運動協議会。大阪。三宅秀雄（壮年会）、辛木多恵（婦人会）、笠置恭宏（青年会）。標句：「教会の自給と内的充実」。翌一九六三年（昭和三八年）、旧東海福音ルーテル教会との合同創立総会。組織の拡大と伝道運動の拡大が、信徒からも指摘されたが、主な強調点は教会の自給への努力に向かって行ったと言いうことが出来よう。

一九六四年（昭和三十九年）の九月号の「るうてる」は、信徒運動特集である。そこには、「燃えよ」藤原哲夫：霊的欠乏。組織、神学、協議会の域を越えよ、との論調が見られる。他の記事としては、「壮年信徒として」深沢孝寿、「修養と親睦」春日克夫、「老人は老人会へ」三宅秀雄。全国に広く拡がり、また組織的にも大きくなり、各施設を多く持つようになった教会の働きを「維持」することが先行し、信徒運動としての創造的また活力的側面が減少していった時期となったのではあるいか。この事の中に、収約的・維持的な課題が大きくならざるを得なかった信徒運動組織の歴史の持つ不可避の必然性と問題性の両者を見る思いである。この実情からの脱皮をも目指して一九六六年「大伝道集会」が東京の日本青年館で開催され全国各地から多くの信徒・教職が参加した。それに先だって、第一〇回全国信徒協議会が広島に於いて、「大伝道に向かつて」の主題で開かれた。この会での協議事項は、①牧師のリーダーシップ、②自給―信徒としての自覚と責任、③神大移転の問題、である。「大伝道集会」は多数を集め得たものの、信徒主導型ではなく、教会行政主導型、教職主導型であったことも、反省検討の材料として記録せねばならないであろう。

一九七二年（昭和四七年）三月の「るうてる」紙の「信徒の宣教論特集」座談会では、主に宣教の停滞の反省が語られている。この座談会の信徒二人が全て東海教区に限られていることも、一考すべき当時の教会の姿を反映しているかも知れない。

周知のように、一九六九年のアフリカのマスマラでのJCM会議（海外諸ルーテル教会の日本宣教会議。註・後にLCM会議と改組され、日本の教会は伝道の被対象教会ではなく、日本の宣教への主体的責任を持つ同等のメンバーとなる）において、一九七四年までに、日本福音ルーテル教会の第一・第二予算（経常費及び教会付帯事業。神学校及び新規開拓伝道及び老朽化対策支援を除き）への援助を辞退し、自給する事を公約した。従って、残された年月の中での教会の自給・自立は緊急の課題となった。「福音を伝え、世に仕える教職と信徒」を標句として、先ず財務的

に他者依存的だった教会の体質の脱皮を目指した教会の「自立」は、経済の「自給」にとどまらず、経済への主体的な責任を負うことから始めて、教会の本質的使命である宣教の主体の教会（教職と信徒）となることが意義であり目標であるが、その意味での教会の「自立」は依然として今も継続的な我々の課題であると言えるのではあるまいか。

一九七三年（昭和四八年）の「るうてる」誌に、鈴木重義氏が、「伝道のない手は誰か」という注目すべき文章を寄せられているので紹介する。従来あった二つの分業論。第一分業論・牧師は伝道―信徒は献金。第二分業論・牧師は説教―信徒は生活。いずれの分業論も超えて、教職も信徒も共に伝道主体として宣教の働きに召されていることの自覚の必要な時では、との論旨であるが深い共感を覚える。

この課題に対する対応を、「るうてる」誌を通して、歴史的に見れば、一九七四年（昭和四九年）六月に、「伝道教育のポイントを探る」との特集号で、○証しする信徒の育成、○反省としての信徒教育、○受洗教育はこれでいいのか、○信徒リーダーの育成、が組まれているが、寄稿者は教職である。前述したように教育の対象としての信徒運動ではなく、伝道の共働者としての信徒の視点と認識を共にする作業が進められる方策が早急に見出され、実行されねばならないであろう。翌年九月号の同誌では、「ホントの自給に向かって」上杉岩雄氏の寄稿で、①伝道の具体性と実践性の欠如、②牧師と信徒の相互責任転嫁性、③礼拝出席への怠慢、が反省として指摘されている。

激変する日本のこの時代にあつて、従来の基本的な信徒運動の歴史の中で、この時代に敏感に対応して生まれ出した信徒運動には、新しい特徴が加えられている。それは、戦時中の国家や社会に対する批判力の希薄さから、時流と当時の国家主義に追従したことへの反省（象徴的には、一九三九年、昭和一四年の宗教団体法成立に伴い、日本基督教団への参加・帰属に表れていよう。）に伴い、予言者の使命を運動体を通して担おうという動きである。この運動は必ずしも、全国的な拡がりや賛同を得たものとは言えないにしても、「草の根」的な性格を持った地方的かつ具体的な運動である。ヒロシマを中心とした「平和と核兵器廃絶を求める委員会」、東京を中心とした「靖国神社の国家護

持に反対する虫の会」、その他、差別問題、アジアの貧困発展途上国への救済援助を目的とする運動、などの向上的で草の根的な運動がある。これに加えて、時宜的な必要に応じて、様々な救援・救済運動に対応する姿勢が現今に生まれていることは(例：ベトナム戦争やペルシャ湾岸戦争の被災者救援運動)、歴史的な視野の中で位置付けられるべき性格のものである。

終わりに附言すれば、各地区(教区)が所有する修養・宿泊施設もまた信徒育成と信徒運動の中で大きな働きをなして来た。特記すれば、九州学院及び九州女学院の高校生への信仰育成に対する阿蘇山荘、東海教区の信徒育成に対する梅ヶ島キャンプ場は、それぞれの大きな意義を果して来たことに触れて、その指導に当たって来られた方々に感謝したい。

〈戦後の信徒運動の評価〉

〔積極面〕

①教会の諸活動としての教育・社会事業への質的また量的充実と新設(例：大阪四条畷の大阪るうてる老人ホーム新設、神学校及び神学生への支援―教職への支援)。

このためには、多くの信徒が自ら献身し、また全国の信徒の群れは祈りと献財を以てこれらの支援を果した。

②教会の伝道と教会の新設の推進。
戦前までのキリスト教に対する無理解と無根拠な批判が、戦後一挙にまた徐々に払拭されるに従って、教会と教職の数は飛躍的に増大した。その背景に信徒集団の支援の力を見る。

③教会学校活動への献身的奉仕。

予め前述したように、本論においてはこの分野については敢えて触れなかったが、毎週日曜早朝から、大きな努力をこの分野に注がれた信徒集団の苦勞を感謝を以てここに特記する。

④教会の経済面の自給・自立の継続と推進。

急速な経済大国の近々の日本の歴史とは言え、キリスト者の数は僅々一パーセントを巡っている日本の現状は変わらない。従って、年々増加する教会経済を支える信徒会員のこの分野における基本的努力は、他諸外国の教会に比べても大きいと言わねばなるまい。殊に一九七四年以後の教会の経済的自立の路線の上にあるわが教会への継続的また発展的な課題を担う意義は大きく重い。

⑤青年伝道と青年期信徒の信仰育成への青年連盟の意義と貢献。

本文においても触れたように、過去、現在、また将来に向かつて、青年連盟との関わりによって教会の現在の多くの働き人―教職と信徒―の育成に重要な貢献を果たす意義は大きい。

〔反省面〕

①信徒運動に対する教会の助言的・指導的育成体勢の不十分。

本文中で藤原氏、鈴木氏、上杉氏の言葉を用指摘したように、信徒運動の育成に対して適切な指導助言を教会は充分に果たしたであろうか。一応、伝道局（部）の管轄のもとに、という伝道主体としての積極的認識を形式的に対応してきたとは言え、内実的には適切な指導が不足し、伝道目標と方法の適切な助言、また靈的育成の不十分さは否めないであろう。

②教会の組織化と多岐活動化によるその活動及び施設への参加が主な内容になり、「運動体」としての独自の視野と創造的な活力の減少。

このことは、一面不可避的な側面を有し、むしろその定着化から言えば積極的な評価をせねばならないかも知れな

い。しかしながら教職に対しての信徒という視野を異にした独自性と創造性を依然として運動体に期待する。

③教会の働きへの信徒の参加が（鈴木氏が指摘するように）、教職と信徒の分業的な働きに終始して来たのではあるまいか。結果として内向きの経済面、管理・維持面にとどまり、教会の本質的使命の伝道の主体として教職と共に働く面が少なかったのでは。その意味での教会の「自立」の課題は続く。

④戦後のキリスト教会の量的ブーム時代から、教会の社会的また時代的な分野における信徒の質的起用と育成が十分ではなかっただろうか。

⑤教会の信徒育成論の欠如の歴史。

「万人祭司」という用語を本家的に用いるわがルーテル教会でありながら、神学的にもまた具体的・実際的にもこの言葉の理解と展開不十分。

〔今後の課題〕

①万人祭司（伝道主体としての信徒）の自覚による伝道の推進。初代教会時代のいわゆる「家の教会」的伝道拠点の設置は、依然として少数者であり会堂新設にも経済的に益々困難になって来た今日に於いて、信徒の伝道主体としての自覚と「発想の転換」が宣教二世紀に向かって期待され問われているのではあるまいか。そのためにも、信徒の伝道信仰の育成が教会にとって焦眉の課題と思われる。

②現代社会（国内及び国外）への問題提起的・教育的・救済的課題への信徒の質的な参加。

このことは教会（信徒運動体）が常に活動の発想者であり主導権を持つことを意味しない。むしろ現今の日本に於いては（明治初期の女権確立や教育へのキリスト教会の活動のように）、社会、環境、政治などの一般的な分野に於いては都会の啓蒙的で独自のな使命は終わろうとしているのではなからうか。そのことは、国内的にとどまらずアジアへの救済活動もまた同様である。従って、教会外の同質の諸活動に対して共働の可能性を積極的に求めるべ

きであろう。しかしてその活動が自己満足的、かつ偽善的にならないために、個人生活との一貫的な連続性を常に自らに戒めておるべきであろう。

③信徒に不信と不安を与えないためにも、教職自身の信仰的、生活的、神学的反省とその実行。

④現代の日本における教会生活、信仰生活、日常生活倫理（クリスチャン・エトス）の確立。「福音と律法」の現代生活への適用の課題。

⑤以前の教会機関誌「るうてる」のような、信徒・教職がお互いの意見を絶えず交換し得る機関誌の「場」の創設。

その場所が現在殆ど見出せないことは現在と将来の教会の体質に対して、致命的な欠陥となることを憂う。全国的に即時実現が困難であれば、教区、地区的なレベルで可能な所から実質的な出発を始めるべきである。

女性信徒の動員―婦人会連盟

山県 順子

はじめに

日本福音ルーテル教会婦人会連盟は、教会創立後三十五年目（一九二八・昭三）に誕生した。

聖書の「群れ」という語にはしばしば深い意味が込められている。女性の信徒運動体のルーツ、女性信徒の群れを新約聖書にたどれば、イエスの周りに自発的に仕えていた女性たちに逆上ることができよう。女性達は、イエスグループの中にいた最初の女性達に、いつも憧憬と励ましを得てその連帯を育んできたと思われる。日本にプロテスタントのキリスト教を伝えた十九世紀のアメリカでは、各派とも特に女性信徒による海外伝道運動がピークに達しており、それはことにも「異教地の女性にキリストの愛を」とのシスターフッド、ウーマンフッドの情熱に支えられてのことであったという。⁽¹⁾ 当時の日本社会はなお一夫多妻の風潮が是認される中、女性の地位は極めて低かった。来日した宣教師、特に女性宣教師たち（一八五九〜一八八二年の二三年間に一八六名⁽²⁾）は、日本女性へ「女子教育」と「一夫一婦制」という、人間の根源的な人権に関わる二大分野において福音をもたらした。ルーテル教会の日本伝道開始、また婦人会連盟誕生はこの時期より少し遅れるが、日本女性が歴史上かつてない明るい陽ざしに生き始めていた時期に当たっていたと言えるだろう。

本稿では、一、を「歴史」とし四つの時代区分による連盟小史を、二、は「考察」とし数項目においてその小論を試みた。なお終わりに「略史年表」「総会員数グラフ」「主題・会報・聖研一覧（戦後分）」を添付した。

一、歴史

(一) 前史

▼初代牧師の女性家族

日本福音ルーテル教会のごく初期の女性信徒群として、初代牧師山内量平の女性家族を覚えておきたい。特に量平の妹^{すまの}季野はフェリス女学院に入学、兄量平の七年前に受洗（二八七七・明一〇）。後に植村正久夫人となるが兄量平や妹熊子、量平夫人の山内幹枝など一族のために熱心に伝道した。季野^{すまの}の代の前後三代で山内家から十七名の女性クリスチャンが出ている。⁽³⁾

▼最初の婦人会

初代牧師夫人山内幹枝は、シェラー、ピーリー両宣教師より婦人伝道師（バイブルウーマン）の任務を受け、⁽⁴⁾最初の教会「佐賀十字教会」に到着（一八九三・明二六）。直ちに日曜学校と婦人会活動に精力的に従事した。

『日本福音ルーテル教会百年史論集』の「山内量平伝」⁽⁵⁾によると、「会長は宣教師夫人であったが、毎週一回会員宅で開催される婦人会集会では、聖書が読まれ、讚美歌がうたわれ、幹枝が聖書研究を担当している。『私は聖書と讚美歌を前に、円座を作って集まる婦人たちを見るのが楽しみである。私たちはエペソに宛てたパウロの書簡を（山内夫人を通して）学んでいる』とピーリー夫人は語っている。⁽⁶⁾幹枝の婦人会指導のちに博多あるいは大阪着後も直ちに開始されていると記されている。また、『ピーリーの日本伝道開始の記録』⁽⁷⁾は、「私たちは仕事の初めから、婦人

の改宗者たちのクリスチャンらしい生活を発展させ、外部の婦人たちにキリスト教の興味を持たせるために、婦人会を設けた。その働きは全く婦人の手にまかせ、彼女たちはそれをうまくやっている。シェーラー夫人は、アメリカに帰るまでこの会の会長であつたし、その後はピーリー夫人が会長をしている。この会は一週一回、聖書研究と祈りのためにもたれている。この会は可成の出席者があり多くの興味をもたれている」と伝えてある。

一方フィンランドミッシヨンによる最初の婦人会は、下諏訪教会創立（一九〇八・明四一）の年に誕生した。『福音ルーテル教会史』⁽⁸⁾によると、長らく婦人宣教師や婦人信徒が祈りをもつてその実現を希望していたこと、参加者は十六、七名。ミンキネン夫人の会長のもと、サオライネン、溝口両師の講話のあとは、刺繍、編み物等の手芸、讚美歌や聖書の恵みを語り合う等、さながら神の国が現出したかのような交わりが、毎月第一、二木曜日午後七時から例会としてもたれていた、と書かれている。

こうして教会婦人会誕生はその教会の創立年とほぼ同年と考えてよいと思われる。一九二三（大一一）年には、大阪、京都、八幡、下関の各婦人会から慈愛園へクリスマス献金が送られている（一九二四・大一一、第五回教会總會記録）。

▼宣教師夫人・婦人宣教師と婦人事業部

初期に來日した主な宣教師夫人・婦人宣教師は、アメリカ系では、シェーラー夫人、ピーリー夫人、ブラウン夫人、リップパード夫人、スタイワルト夫人、ミラー夫人、エカード宣教師、ノルマン夫人、パウラス姉妹宣教師、ポッツ宣教師。フィンランド系では、ウエルローズ夫人、クルビネン宣教師、ウーシタロ宣教師。デンマーク系では、ウインテル夫人、ネルセン夫人等であつた。前述したごとく、この時期の日本における宣教師夫人・婦人宣教師の働きは非常に大きかつたが、ルーテル教会内でも、リップパード夫人が佐賀幼稚園創設（一九〇二・明三五）、M・パウラス宣教師が慈愛園創設（一九一九・大八）、エカード宣教師が九州女学院を創設（一九二六・大一一）している。特

に、第一次教憲教規制定（一九二〇・大九）後の、アメリカ系の婦人の働きは、二院制による連合行政委員会下に位置付けられた「婦人事業部」に所属し、この部の任務は日本女性によるキリスト教関係の学生や各種教師の育成に当たることであつた。⁽⁹⁾ その経費の多くは婦人事業部予算によつており、⁽¹⁰⁾ 働きの実績は毎年の総会（年会）で報告承認されている。婦人事業部はまた、婦人会連盟の誕生や育成にも深くかかわつた。創立大会費用の半額負担、文書委員や連盟顧問への就任（ノルマン、パッツ、エカード、リッパード他）、また大会には毎回多くの宣教師夫人・婦人宣教師が出席し、婦人事業部が育てた日本の女性教師たちも婦人会長や連盟役員としても大いに活躍している。

▼邦人の女性教師・神学生の誕生

初期の婦人伝道師には山内幹枝、神学生には森田つる等⁽¹¹⁾がいるが、婦人事業部報告には、一九三〇（昭五）年頃までに教師や神学生になつていた人々として、保母・幼稚園教師の野中みさ、松永チマ、近藤ヤス、富岡ヨネ子、井手二三子、坂井松枝。神学生・伝道師の古賀千代、木堂貞子、林千織、磯部スミ、吉田初枝、亀山秀子、乾アサ子、秋本藤枝等の名前が見られる。⁽¹²⁾ これらの女性はルーテル教会の初期伝道活動において、特に宣教師夫人・婦人宣教師たちの活動にとつては、なくてはならぬ協力者であつた。⁽¹³⁾

これら初期女性宣教師・宣教師夫人と日本女性同労者の働きについては、別途研究されるべき大きいテーマであると思われる。

▼米国学留牧師の女性観

稲富肇牧師は一九〇八（明四二）年から十一年間米国に留学した。連盟創立者の一人である稲富夫人は連盟会報八号の取材に際して当時を回想し、「帰国後の稲富が第一に考えたことは、日本婦人の美德として貴ばれている家内という言葉に隠されている、婦人の能力、知力、体力をもつと發揮し、日本にもどうかしてアメリカのような婦人会連盟を結成させたいということでした」と手記を残している。また岸千年牧師は一九一九（大八）年より四年間口

ノーク大学に留学したが、その卒業式で三名のスピーカーの一人として「日本における女性の解放」と題したスピーチをしている（一九九二年現在当原稿現存の有無は不明）。初代連盟会長を務めた岸牧師夫人の母、米村琴子からは、後に続くものとして三名の連盟会長が誕生した（娘岸恵以は戦後の第二、第四期会長、同辛木多恵は五期会長、孫娘西千恵は十一期会長）。こうして両牧師の女性観は、連盟の創立と成長に大きく影響していると思われる。

（二）連盟創立から終戦まで

▼婦人文書委員会設置

以上のような時代背景を受け、第八回教会総会（一九二七・昭二久留米）は、婦人文書委員会設置を決議した。「我が教会ノ婦人会内ニ信仰並ニ伝道精神ノ涵養ノタメ婦人文書委員会ヲ設ケ、内外婦人各二名ヲ以テ之ニ当タラシム。但シ行政委員会ニ委員ノ任命ヲ委託ス」。提案者は「稲富、三浦、坪池三氏」となっている。委員には、ノルマン夫人、ポッツ宣教師、米村夫人、稲富夫人が選出され、この委員会は直ちに活動に入った。⁽¹⁶⁾一、各婦人会例会用プログラム作成と文書（例会手引き用リーフレット）の発行。二、婦人会大会開催準備。三、「るうてる」婦人欄設置要請と掲載。この最初の婦人欄（一九二七・昭二、一九八号）には、「るうてる婦人欄をお読みにならない方は婦人会の落伍者におなりになりませう」など委員会の意気込みを伝える下りや、例会プログラム概要をひと月づつ早く掲載すること、婦人会長にはリーフレットを送ること、「一年間は無代」とすること等が記されている。

こうして全国の婦人会プログラムは一つに統一された。

▼婦人会連盟創立

婦人会連盟創立大会は⁽¹⁷⁾一九二八（昭三）年四月十七〜十八日の両日、熊本水道町教会において開催された。二講義所を除く全教会と講義所（十九教会と四講義所）より、代表三十五名他約七十名が参加（内八名は宣教師夫人と婦人

宣教師)。参加予定者の実数は掴めないまま、予想外に多い参加者であつたらしい。初日は夕刻七時よりの開会で、礼拝（説教稲富伝道委員長「主来りて汝を呼び給ふ」と歓迎会。二日目は祈祷会、議事、感話会、慈愛園參觀、聖別会等が行われている。規約採択、役員選出（會長米村琴子、副會長本田やす子、書記長尾タミ子、会計近藤多恵子）を経て、待望の全国ルーテル婦人会連盟が成立した。創立大会採択の連盟規約は全体で八条である。二条目的は「婦人会相互ノ理解ヲ増シ、協力シテ神国ノ建設ニ務ムルコト」。三条組織は「本会ハ、日本福音ルーテル教会ニ属スル婦人会ヲ以テ組織ス」とうたい、個人会員の連盟ではなく婦人会の連盟であるとしている。八条会費は「大会費ハ、婦人会員一人ニ就キ一ヶ月金五錢宛ヲ、各婦人会会計ヨリ毎年三月末日マデニ大会会計ニ送ルコトトス。ソノ一部ヲ文書費トス」となっている。

当大会については、宣教師会年次報告書『ミニッツ』⁽¹⁹⁾も、ヘブナー宣教師とノルマン夫人のレポートを詳しく掲載し、大変熱のこもつた大会であつたこと、女性たちに心からのお祝いを伝えると共に連盟の素晴らしい発展を信じていること等を伝えている。特にノルマン夫人は文書委員としての準備中の不安や神の導きの確信、また会計については大会総会予算は二五〇円であり、本教会と婦人事業部が一二五円ずつ負担することになつた経過を報告している。⁽²⁰⁾

同年の教会総会文書委員会報告は「連盟が将来我が教会の大なる補助者とならんことを切に望む」と結んでいるが、これに対して同總會記録は次のような一文を添えている。「稲富書記、婦人文書委員会ヨリ提出セル報告ヲ朗読シ、受ケ入レラル。年会ハ婦人会連盟ノ成立ヲ喜び、更ニソノ堅実ナル発展ヲ祈り、年会議長ヲシテ必要ニ応ジ連盟ヲ後援セシムルコトニ決ス」。こうして連盟は祝福された船出をした。なお、創立大会出席教会は、東京、荏原、名古屋、京都、大阪、神戸、下関、門司、博多、甘木、直方、大牟田、佐賀、小城、久留米、水俣、熊本、九州学院。

▼感謝献金・世界祈祷日・部会発足

一回大会で採用が決まっていた「感謝箱」（日々の感謝を献金）の集計が、二回大会（一九二九・昭四久留米）で

報告され（一五六円九〇錢）、この初回の感謝献金は支那ミッション教員の俸給と内地伝道のために献げられた。以後広く国内外の他者に献げられてきたこの感謝献金活動は現在（一九九二）も継続されている。また、超教派の婦人会活動である世界祈祷日（三月第一金曜日）への参加も、四回大会（一九三一・昭六門司）から萬国祈祷日への積極的な参加呼びかけとして開始された（米国で一八八七年に始まったこの運動は一九九二年現在一七〇カ国が参加）。

一九三五（昭一〇）年からは各地に部会婦人会が誕生した。⁽²¹⁾この年は九州南北両部会（北部 於福岡・南部 於熊本）が、翌年（一九三六・昭一一）には関東部会（於ルーテル神学校）が、また一九三八（昭一三）年には関西部会（於大阪住吉教会）が開催された。いずれの部会も、礼拝、講演、祈祷会、議事（報告・規約・役員選出）、親睦、記念撮影、といった整った形で行われ、後日の連盟大会で部会報告がなされている。部会は戦後結成分を含めると七部会になるが、戦前はこれら四部会によって連盟の連帯がさらに強められた。部会は後の教区婦人会の前身である。

▼時局下の連盟

七回大会（一九三七・昭一二京都）の記録あたりより、時局の影響を見ることが出来る。感謝献金に対する伝道部長の感謝状には時局の困難さも記され、この年の感謝献金は「鮮満伝道」へと可決。八回大会（一九四〇・昭一五下関）の記録には決議事項の冒頭に「皇紀二千六百年記念事業として」との前文が付され、奉祝記念の連盟機関紙発行（保存分なし）、ルーテル教会奉祝記念伝道原案への参加、同時刻同題目を制定して時局祈祷会を持つこと等を可決し、戦地の二教職へ慰問袋を送っている。この年の伝道部長の感謝状には「宗教団体法実施に伴い我教会に教団規則制定され」「鮮満伝道の期熟し伝道戦線は遠く満州迄」等の記述が見える。翌年一九四一（昭一六）年に第二次大戦勃発、国を挙げて戦争へ傾斜したこの時期、教会は厳しい苦境に立たされたが、連盟も共にそのうねりに吞まれたかに見える。この八回をもって戦前大会は終止符を打ち、以後戦後まで連盟関係資料は次の一枚を除き一切保存されていない。

ルーテル教会も第五部として日本基督教団へ合同した年の翌年、一九四二（昭一七）年一月二六日に、日本基督教団婦人事業局が開催した「第一回基督教者婦人指導者修養会」のプログラムが残されている。国民儀礼に始まり、講演は「平出大佐に交渉中」とある。「各部代表者報告」では第五部のルーテル婦人会からも報告があつたであろうか。参加者への注意事項には、「敷布二枚持参、洗濯代二十銭、米一人配給料四食分（三合三勺）、砂糖凡ソ大匙一杯半乞持参」等が記されている。戦時中の女性信徒や婦人会の貴重な証しを集めて、記録に残す必要があると思われる。

（三）戦後からうてるホーム完成まで

▼戦後第一回連盟大会

日本福音ルーテル教会は戦後二年目に日本基督教団より離脱、翌年一九四八（昭二三）年秋に博多で開催された再建総会は、新たな伝道体制を期して信徒からもそれぞれ委員を選出。婦人会委員としては、岡本牧師、ハーダー師、三浦夫人、稲富夫人、川瀬夫人が選出され、翌年一月伝道部主催で開かれた各委員会連合の協議会では、五つの地区会の結成を議した。婦人会は特にゴットワルト、シャーク両宣教師の四月来朝を好機として、再建後第一回の連盟大会を熊本で持つことを決定。二月と三月のわずか二か月間で、五つの地区会（関西、北九州、中部九州、関東、南九州）を開催、連盟大会に向け迅速な準備を行った。これらの地区会では各々規約作成、予算編成、新役員選出がなされてお⁽²²⁾り、再建大会への熱い対応が読み取れる。

こうして戦後第一回連盟大会は一九四九（昭二四）年四月二〇～二一日、九州女学院で開催された。三一教会より一〇三名が参加。米持参、宿舎へはトラックで移動という状況であつたが、霊的な癒しに満たされた大会であつた。説教山内六郎伝道部長、講演シャーク宣教師。決議事項は感謝献金設置、婦人献身者援助、文書委員設置、教職未亡人慰問、修養会開催、米国全ルーテル大会へ挨拶状送付、米国ルーテル教会へ感謝、の七項目。役員に会長三浦道

子、副会長稲富いよの、書記岸恵似、会計川瀬朝子、を選出した。大会会計は伝道部よりの補助金四万、米国婦人ミッシヨンより二百ドル（七万二千）、大会費七千余円で賄われた。

なお、連盟大会は戦前戦後を通じ、慣例として大会の中で総会を行う形が取られており、「大会決議」と「総会決議」はほぼ同義語として用いられている（但し十四、十五期は、大会と総会を分離）。

▼自立にむけて・会報発刊

二回大会（一九五一・昭二六東京）の第一決議は「伝道部よりの補助金辞退」である。大会記録によると「教会を助ける苦の婦人会連盟が年額四万円を伝道部から受けている。連盟は教会の負担になつては心苦しい事であるからこれを辞退したい。これに関し会計より会費増額の説明あり、補助を辞退する事に満場一致可決」とあり、年会費を一挙に六十円から倍額の一二〇円で可決している。この大会から設けられた決議文も「（連盟の）運営を自らの手で行的積極的に教会の自給独立の力となることに努力致します」と謳い、女性会員の教会自給協力への思いが熱く結晶している。連盟の自立はこの時あつたと見てよいと思われる。三回大会（一九五四・昭二九博多）の第一決議は、「連盟会長を本教会総会の推薦議員に申請」である。大会記録は「本連盟は日本福音ルーテル教会の一翼であり、神国建設に努力することを目的とするので教会との密接な関係を保ち、その進むべき方向に一層協力するため正議員若しくは準議員の資格が与えられる様常議員会に申請することを満場一致可決」と記している。これについては第三二回教会総会（一九五五・昭三〇）の記録中にある連盟報告に、「連盟会長に総会に於ける準議員の資格が与えられた」とあるが、その後この資格が継続された形跡はない。一九五六年（昭三一）年、以後十年にわたり毎年開催された「全国信徒運動協議会」が発足した。壮年、婦人、青年、の各信徒会の連合体で連盟役員外の一一般の女性信徒も参加している。この協議会の初年に当る連盟感謝献金の一部は神学校卒業生のガウン代となつており、これはこの協議会と合同の捧げものであつたと考えられる。

連盟「会報」は一九五五(昭三〇)年に創刊した。但し四号までは「るうてる」の付録として発行されている。五号からは独立会報として連盟から発行。五号の一面には「ルーテル教会婦人講座」が掲げられ、序文で、ルーテル教会に属しながらその特徴、信条、礼典の意味を答えられない人が多いため、と理由をのべている。以後年三回着実に発行を続け、連盟諸活動の中でも全国を結ぶ絆として中心的な働きを負ってきた(一九九二年九月号は百号目。発行部数三、一八〇。一二期より英文会報も発行)。

▼東信北部会、山陽部会、東海部会発足

東信北部会はフィンランドミッシオン系の教会によつて発足した。フィンランドミッシオンは一九〇〇(明三三)年に日本伝道を開始。一九一四(大三)年に約十教会で「福音ルーテル教会」を組織。一九四〇(昭一五)年に日本福音ルーテル教会と合同した。戦後の教団離脱時には共に行動をしていないが、一九五三(昭二八)年日本福音ルーテル教会と再合同した。この時、同ミッシオン系の教会は東京、信濃、北海道に散在していたため、東、信、北の三文字をとつて東信北部会組織という形で日本福音ルーテル教会内に位置づけられた。各教会婦人会もこれにならない同年、池袋、大岡山、上諏訪、飯田、岡谷、札幌の広範囲で東信北部会を発足させ、婦人会連盟に加入した。⁽²⁴⁾

「まず東洋のリーダー、日本から」とフィンランドミッシオンが日本伝道を開始したことはよく知られているが、一九〇〇年時のその動きの中心は婦人たちによる三一の「編み物会」であった。フィンランドの日本伝道への情熱はその後一貫して捧げられ、伝道サークルとしての「編み物会」は現在では二三二である。⁽²⁵⁾ これまで九二年間に日本へ派遣された宣教師は七七名、この内女性宣教師・宣教師夫人は五二名である(ワップ・カタヤ師調べ)。池袋教会の石坂真砂姉(一八九五・明二八生、一九九二年現在九十七歳)は、同ミッシオン系の各地の幼稚園に終生献身的に奉職、フィンランド国民の日本に対する心の深さ、特にニエミ宣教師の場合は、母親が果たせなかつた日本伝道への悲願を娘が実現した例であることを熱く語っている。⁽²⁶⁾

山陽部会婦人会は一九五五(昭三〇)年、三原、西条、広島、宇部、下関の五教会により下関教会において発足した。翌年春、西条教会に連盟会長を迎え、第一回総会を開いている。一九五一(昭二六)年より米オーガスタナミツシヨン(スウェーデン系)は、日本福音ルーテル教会内の一つの部会として主に山陽地方の都市部に伝道していたが、その教会群(一九五五・昭三〇年当時約一五教会)が山陽部会で、後に中国部会と改名した。婦人会もこれになり一九六〇(昭三五)年、中国部会婦人会と改名した。

東海部会婦人会は一九五七(昭三二)年に、名古屋、挙母、復活、岐阜の四教会婦人会で結成された。この結成会には、戦後日本伝道を開始した米国の「福音ルーテル教会(ELC)」の系列にあつた恵教会が招待されている。ELCは主に東海地方を伝道地としており、一九六〇(昭三五)年に約二十教会で「東海福音ルーテル教会」を組織⁽²⁷⁾、三年後の一九六三(昭三八)年に日本福音ルーテル教会と合同した。これは教区制施行と同年であるが、両教会間で次のような合意のもと、教会相互の編成替えが行われた。すなわち、東海福音系であつた小石川、本郷、板橋、の三教会は東教区へ、日本福音系であつた名古屋、挙母、復活、岐阜、の四教会は東海教区へ組み入れられた⁽²⁸⁾。東海教区婦人会は一九六五(昭四〇)年に二十教会で結成されているが翌年の連盟への加入登録は右のような教会の編成替えに従つてなされている(但し東教区へ編成替えとなつた小石川教会はこの時点では連盟未加入)。こうして教区制施行前は合計七つの部会があつた。

▼るうてるホーム建設

るうてるホーム建設は、婦人会連盟活動としては最大規模のものである⁽²⁹⁾。三回大会(一九五四・昭二九、博多)で出された教職未亡人用の小ホームの提案が、その後緊急に老人ホームの建設が待たれているとのことで大規模な計画に変わり、一二年間にわたり総力が結集されることになった。四回大会(一九五七・昭三二大阪)で委員会設置と感謝献金金額を捧げることを可決、五回大会(一九六〇・昭三五、熊本)では審議難行の未無料老人ホーム建設と百五

十万円募金を可決した。本教会へこの募金を添えて「建設請願書」を提出、常議員会承認（一九六二・昭三七年度第三回）後は、「ホーム設立委員会」設置（伝道部長、関西部会長、社会厚生部、連盟会長、関西部会婦人会長他）。社会福祉法人とするため諸準備がなされ、総予算六千万円が組まれた。協力要請のため辛木連盟会長は全国婦人会訪問、国庫及び大阪府の補助金申請や各界への寄付金要請等には諸委員、役員が多大な尽力が、また全国の協力関係者からは熱い募金が捧げられた。厚生大臣より「社会福祉法人うるうるホーム」の正式認可（一九六四・昭三九）を得、翌一九六五（昭四〇）年五月二十八日に竣工した。設立委員会会計報告の収入欄には、国庫及び大阪府補助一、二五〇、〇〇〇円、日本福音ルーテル教会七、二〇〇、〇〇〇円、婦人会関係三、〇八一、七〇一円、地方教会八五〇、六六三円、法人関係二一、一三五、〇〇〇円等の数字が見られる。連盟の「五つのパンと二匹の魚」が六千万円の事業に祝福され、連盟から社会への捧げ物とも言うべきうるうるホームは、その後四半世紀間に、経費老人ホーム、特別養護老人ホーム、デイサービスセンターと、大阪四条畷の地に深く根をおろしその働きを拡大している。

（四）連盟事務局設置に向けて

▼教区婦人会・規約改正・アジアへの視点

うるうるホーム完成の頃は、教区制施行（一九六三・昭三八）、ブラジル伝道開始（一九六四・昭三九）の時期に重なり、連盟の感謝献金捧げ先にもこの年より新しくブラジル伝道が位置付けられた。七つの部会婦人会は暫時各教区へ移行。関東及び東信北部会は東教区へ。関西及び中国部会は西教区へ。九州南北部会は九州教区へ。東海部会は東海教区へ。北海道については少し後年であるが、東教区北海道地区婦人会発足（一九七三・昭四八）後、北海道特別教区制施行（一九八〇・昭五五）に伴い、二年後に東教区から独立、北海道特別教区婦人会を結成した。

東海教区婦人会群が一举に加わったこともあり、新時代を迎えこの頃は、規約が盛んに改正されている。大会会員

選出方法の変更（七回大会一九六六・昭四一、東京）、教区会長の連盟役員会出席（八回大会一九六九・昭四四、神戸）、創立以来の二条目的の条文変更（九回大会一九七二・昭四七、博多）。すなわち「神国の建設に努める」は「教会に協力して福音宣教に努力する」となった。この回より決議文も声明文に改められた。さらに役員は全国二プロックより選出、議員選出は教区から個教会選出へ（一回大会一九七八・昭五三、滋賀）等と続いている。

一方、この間の大会講演や分団協議、パネルディスカッション等を通して世界へ視野が広がり、連盟総主題も十一期（一九七八・昭五三より）は「共に生きるく目を広く世界へ」、十二期（一九八一・昭五六より）は「恵みに応えてくアジアに生きる」を掲げ、会報や各教区地区の修養会等でこのテーマが展開されている。NCC（日本キリスト教協議会）やACWC（アジア教会女性会議）など外部への関心も高まるようになった。また本教会内の連盟の位置付けについて、外郭団体か、任意団体か、自立団体か、信仰運動体か、といった視点の議論と、同時に連盟事務局の必要性を訴える声が次第に高まっている。

▼教職夫人援助金・女性教職待望

戦後間もなくから、名称を変えつつも配慮が続けられてきた教職未亡人積立金の運用方について、一二期（一九八一・昭五六より）連盟内に同積立金運営委員会を置き検討。一二期は見舞い金としてこれを運用、一三期（一九八四・昭五九より）は凍結したため、一四期（一九八七・昭六二より）に再度研究委員会を設置、同委員会は全国教職夫人へアンケートを実施する等検討を重ねた。その答申を受けて一五回総会（一九九〇・平二、大阪）は当積立金を「教職夫人援助金」として現職の教職夫人にも適用することとした。なお一九八八（昭六三）年までの教職未亡人関係総支出額は三、一五五、五三〇円（研究委調べ）となっている。

一三期会報から、聖書を女性の視点から読み直す新しい神学にもとづく関係記事が掲載されている。「女性牧師を育てる」（八一号、一九八八・昭六一）。「婦人と伝道」（八二号）。「キリストによって新しく造られく女性牧師のす

め」(八四号)。「女性牧師を必要とする教会になろう」(八五号)。これらは「女性と伝道」というシリーズものとして掲載されている。女性の自立が世界的な波動となつていく中で、女性キリスト者の間にあくまで男性を優位としてきたこれまでの聖書解釈に根源的な変動となつてきている。当教会では女性教職の按手が認められているにもかかわらずその数は極めて少ないため、女性献身者支援はその後も連盟の重要な課題となつていく(一九九一年に内藤文字牧師受按、待望の二番目女性教職誕生)。一三期からは女性リーダー育成のための、「連盟リーダー研修会」も実施されるようになった。

▼創立六〇周年記念大会と連盟事務局

婦人会連盟結成以来六〇周年目の記念大会は、一九八九(平一)年六月六、七日、ホテルニュー京都で開催された(正確にはこの年は六一年目)。サンパウロ教会からの出席者や幼児一四名を含め、全国から四五〇名が参加。記念絵葉書の発行、一般公募の大会歌とユニフォーム用Tシャツデザイン等で大会を盛り上げた。記念講演タイトルは「四期主題そのままに「キリストこそ平和」つかわされる女性たち」。井上洋治神父(講師)は、イエスのまなざしの中で初代教会の女性たちは男性と全く同等に働いていたと講演。前夜祭、記念礼拝、晩餐会、召天者記念礼拝とそれぞれ六〇年の感謝が込められ、フォーラム「連盟の夢」の発題と公開討論では連盟事務局実現に向けて熱い意見が展開された。一五回総会(一九九〇・平二大阪)では、連盟事務局設置提案が圧倒的多数で可決された。時あたかも日本福音ルーテル教会百周年記念事業期にあたり、新築される百年記念会堂(東京)内に、連盟事務局が設置されるとの決定が一五期連盟内に設けられた事務局設置委員長を通して翌年の秋には伝えられた。当初より場所の確保は最大の難関であり、本教会の多大な好意によるとはいえ、百年事業募金に全連盟会員が参加協力するという形で実現が可能となったことは、連盟諸先輩の祈りの賜物であると思われる。

一九九二年三月の統計では、連盟総会会員二、〇一二名、加入教会一二六(全教会の90%)である。一九九一年度

に文書會計（会報関係）の不足を補うため行われた緊急募金に対しては、九四二、五一〇円の献金が寄せられている。

二、考察

（一）本教会内の連盟の位置付け

▼教会成長と女性

「婦人会あつての教会」という表現はよく使われてきたが、婦人会連盟の本教会内の位置付けについてはとかく明かな見解が得られていない。主に本教会總會記録と「るうてる」にその手掛かりを求めて考察してみたい。

戦前第八回教会總會での婦人文書委員会設置と、九回總會の連盟創立関係の記録については既に述べた。しかしその後の同委員会や連盟についての記録は、戦前の總會記録中には全く見ることができない。わずかに一二回總會記録中に「連盟会長挨拶。稲富氏年会を代表して答辞を述べ」とあるにとどまる。戦後については、前述のごとく再建總會記録に婦人会委員の氏名が上げられ、以後翌年の總會記録からは、伝道部員として他の信徒会々長と共に連盟会長名が併記されると同時に、伝道部長名による各会活動報告の中に連盟報告もほぼなされている（中には連盟会長名で報告されている年もある）。しかし、教区制施行（一九六三・昭三八）後の翌年からは、この二つの位置付けは忽然と消失している。伝道担当委員会名が信徒会から各教区へ切り替わっていることから、新組織後伝道方策に変更があったことが伺える。その後約二〇年を経た第一回總會記録（一九八四・昭五九）の諸委員会報告「伝道局長関連事項」⁽³⁰⁾に、初めて連盟を正面から取り上げ評価する貴重な報告が見られる。次のように要約ができる。「世界の趨勢からみて、婦人の運動体から教会に対して幾つかの問いかけが起こっていることを見落としてはならない。一、教会

員の過半数が女性であるという実情において、婦人起用の課題が不十分にしか取り上げられていない。欧米においては婦人教職が急増している。二、戦争責任や経済問題においてアジアにおける日本の教会の課題を考えると、婦人会連盟がアジアへの視点を持つてゐることは、積極的な意義がある。かつて連盟が老人問題を先取りして、るうてるホームを建築した感覚はなお健在であると思われ、今後も婦人の貢献に期待せねばならない」。その後の総会記録としては、第一四回と一五回総会（一九九〇と一九九二）に、連盟の方から掲載を要請し受け入れられた、「婦人会連盟報告」が入れられている。

一方「るうてる」の婦人欄は、一九二七—一九五八（昭二—三三）年まで戦前戦後を通じ、ほぼ一頁の割り当てで例会プログラムの他にも連盟活動や女性の意見を幅広く掲載している。これら伝道、教育、奉仕、聖書等についての女性の原稿には、感性あふれる優れたものも多い。しかし、一九五八（昭三三）年以後は連盟の独立会報が発行されたためか、徐々に割り当てスペースを減じ、一九六五（昭四〇）年に婦人欄は廃止されている。その後は連盟大会報告も無掲載の年があり、女性信徒への関心が従来とは極端に変化していることが解る。

これらの資料からうける感想は次の二点である。一つは、教会の草創期や戦後の混乱期には、女性の信徒活動も行政から歓迎されているが、教会が安定し成長期に入ると、結果的に教会中枢部の関心外におかれてきたと思える点である。これは聖書における初代教会後の教会と女性信徒の関係の歴史にも一脈通じるところがあるように思える。二つ目は、教会行政のなかに信徒運動体の明確な位置付けがないと思える点である。信徒運動体は、学校でもなく、施設でもなく、無性格なものとしてその存在意義が正当に検討されないまままきまきであるのではないだろうか。特に婦人会連盟のように、経済的に自立しているものは、行政との接点をもちにくいことはいえるだろう。

しかし、連盟を支える各教会婦人会はまず各教会にあつてより実際の働き手である。特に戦後はその数において教会経済の大きい担い手であり、とりわけ教会史上不可欠であつた献堂や教会改築のためのバザー収益は、その大部

分が教会婦人会の働きによって生み出されている。今日日本福音ルーテル教会から連盟を除いたら何が残るかという言葉をよく耳にするが、その目的に「教会協力と福音宣教」を掲げ、全国に散在する各個婦人会を励まし、ひいては全国教会の連帯感を育んで来たのが連盟である（後述）。各婦人会と連盟は、イエス・キリストに呼び出された群れとして、教会のために連帯していくという志を、ある時は個人的な敬虔さにすりかえたくなる誘惑に耐えてよく持続してきた。教会成長は信徒の動員にあると考えるとき、六四年間の歲月（一九九二年現在）をかけて形成されてきた教会内最大の信徒運動体は、本来的に正統な教会の力として積極的に位置付けられて行くべきであると思われる。

▼規則と女性

連盟史上四回にわたり、「連盟会長を本教会總會の準議員または推薦正議員に」、との要望が出されている。本教会總會下に正式な位置付けを持たなかった婦人会連盟からのこうした要望は妥当ではないとする見解が一般的であると思われる。が、前述のごとく連盟はこの要望を既に一九五四年（昭二九）年の時点で總會第一決議として、準議員の資格を得たとの記録があるものの、継続されていないのは一時的なものであつたかと推察される。それから約三〇年後（一九八三・昭五八）、「連盟会長と教区会長を本教会及び教区の常議員へ」との要望が同じく總會からのものとして提出されている。これに対する常議員会回答³¹を要約すると「連盟会長の本總會推薦正議員資格は可能、常議員へは疑義あり」となっている。一九八九（平一）年と翌年の二回にわたっては連盟合同役員会名（含教区会長）によって、再び「連盟会長を本教会の推薦正議員に」との要望が出された。この時点では九州を除いた各教区会長は、既に各教区總會下に推薦正議員資格を得ていたためである（その後九州教区も他教区と同様となる）。これに対する常議員会回答³²の要約は「連盟は教会内任意団体で總會下に正式な位置付けがない。準議員でありながら推薦正議員数に制限があるため推薦できない人がある。教会構造変更案が採択されれば連盟は教会内運動体として正式な位置付けが決まるので審議を見届ける要あり」となっている。

多くの教会女性の素朴な疑問は、教会にとつて規則は絶対的なものであるのか、本来規則はその組織体を豊かに機能させるためにあるのではないか、ということである。むしろ個教会で婦人会の実質的な働きをみとめ婦人会長を役員に加えている教会は多い。また他の信徒会は存在しないにかかわらず、婦人会長名では役員に入れられないとする教会もある。全国的な合意線はまだ生まれていないようだ。女性たちは少なくとも規則以前の教会の信徒観、女性観を問うているのであり、本教会規則が婦人会連盟の実質的活動を包括しえていないことを直感的に把握し、よりスケールの大きい柔軟な教会規則を求めていると思われる。

(二) 連盟存続の理由・課題・展望

▼連盟によって育まれた婦人会

婦人会連盟では当然のことながら、女性の思い、願い、希望が語られ受容されてきた。創立以来の教育的配慮が定着し、例会は礼拝を持つことから始まり、讚美歌とみことばと祈りが常にあつた。また社会から遠い存在としての家庭婦人に焦点が合わされ、司会者用の手引きや、改正後の新しい規約、聖書研究用のテキストが定期的に配布され会の運営を助けてきた。わけても聖書研究は今日教会聖研が下降ぎみな中にあつても、婦人会聖研はおおむね盛会である。主婦層が多いとは言え、決議機関としての総会を持ち、低額会費による独立採算会計を守つて来た。連盟教区の役員会報告、教会地区の修養会報告等はいずれの地においても作成発行されてきた。また社会や世界への窓口を設け、リーストコインや感謝献金の参加を通して、とかく閉鎖的な一家庭婦人、個教会婦人会に解放感を与えてきた。たとえ僅かでも全国婦人会にNCC、ACWC、LWF（世界ルーテル連盟）の情報が届けられた。一方任意団体という位置付けながら担当牧師（指導・協力牧師）や個教会牧師の協力を得、殆どの加入教会において牧師夫人の全面参加があつた。大方の婦人会で、連盟は核的な役割を果たしてきたと思われる。

こうした一つ一つの積み重ねが連盟活動六項目の定着を生み出した。それらは、一、交流と情報の場としての会報発行。二、原則として共通の聖書箇所による聖書研究。三、各期ごとに掲げられる総主題とその活動。四、日々の感謝を他者に捧げる感謝献金。五、定期的な全国、教区、地区総会や修養会開催。六、世界祈祷日（NCC婦人委主催）やA.C.W.C研修会等他教派との交流、である。これらの各項目についてはいずれ連盟内で小史が編まれるであろう。こうして各個婦人会が連盟によって育てられ成長した部分は大きいといわねばならない。無論連盟も各婦人会に支えられ存続してきた。両者間には、キリスト者女性としての感受性、直感性、神秘性、献身性、小事を積み上げる実行力等の、よき応答が自然に行われ、運動体としての連帯をを培ってきたと思われる。

▼課題―連盟の灯

連盟は発足後六四年間で二千名余の会員数となった。中央に事務局がないまま運営はすべてボランティアで行われてきた。各役員の家は半事務局化し、各地に点在する他役員間との複雑な全体作業は、もはやボランティアで担える域を越えるものとなっている。幸い宣教百年を機に連盟事務局が与えられることになった。場所は確保されたが、専従者の給与、維持費等事務局機能化までの課題は大きい。これまでも地方の婦人会にとつて連盟や教区は遠いとの声が聞かれてきたが、加えて連盟理解の浅い若年の教職や会員層も増え、反面老年パワーの役員誕生など、例えば連盟パンフレット、役員テキスト等、新しい文書活動が必要ではなかるうか。これまで連盟はよく学びよく献げてきたが、伝道と連盟、ディアコニアと連盟、社会と連盟といった視点からの成長はこれからのように思われる。地区や教区ではこれらのよき実践例があるが、全国レベルにするためには委員会制の導入も考えられる。また、これらについては他教派やL.W.F先輩教会の女性信徒運動体に学ぶ点も多い（例、日本バプテスト婦人連合会会員約四千五百、C.S.生徒全国大会及び女子献身者研修会の定期的開催、宣教師二家族を海外派遣。日本基督教団全国教会婦人会連合会会員約二万余、老い、生命、婦人教職、世界教会等の委員会八つ。ミルーテル教会婦人会く暴力、貧困、飢餓、環

境等への取り組み⁽³³⁾。また現在では職業婦人が家庭婦人の数を越え、専業主婦中心で来た婦人会は活動内容の検討が必要になると思われる。世界的に女性の課題が注目される中、女性リーダーを育て参加して行く連盟の国際部門の充実も急がれる。教会構造改正によって連盟は社会局に包括されることになった。本教会と信徒運動体が互いに必要とされ合う新しい関係に期待したい。ひたすらに善意を捧げ続けて来た連盟の灯をさらに明るくするものは「万人祭司」育成の明確な視点である。この教えは性別を含まない万人のものであり、女性は教会の中で本来的に男性との間に平等を有している。教育や訓練プログラムのもと、エネルギーの開花が待たれる。

▼展望—世界伝道

一九八二（昭三）年に連盟は祝福されて誕生したが、その僅か九年前、隣国韓国で起こった三・一抗日運動では、主導者としての若い女性キリスト者たち（多くは学生）が検挙され、拷問され、惨殺されている⁽³⁴⁾。当時の日本の女性クリスチャンは事実を知らされていなかったとはいえ、今この二つの出来事を比較するとき、歴史の重さの前に沈黙せざるを得ない。こうしてキリストの天命、世界伝道のビジョンは、男性も女性もすべてのキリスト者を目覚めさせる。無論戦責問題に應えることは、日本を動かすほどの真摯な国内伝道を起こすことでもある。

一九九〇年、ブラジルのクリチバで開かれたLWF総会では会期中を通して女性の交わりと討論の場が設けられ、次の声明を発表した（抜粋）。「私たちは、私たちとLWFに属する教会が、世界のすべての人を含めた霊的な交わりのしるしとなる努力を一層強める。女性が教会生活のすべての分野で捧げ得る潜在能力によって、教会が利益を受ける明確な行動計画を遂行する。会員教会の女性教職の按手のため、女性の連帯と超教派時代に生きるプログラムを主導する」。またWCC（世界教会協議会）の「教会女性十年」のプログラムは一九九八年まで続く。

一九九二年の九〜十月にかけては東京、大阪の二会場で、LWFアジア訓練研究促進プログラム日本委員会主催の「アジア女性宣教会議」が開催された。講師にLWFの女性主事ムシンピ・カニョーロを迎え、香港、韓国、インド

ネシア、台湾、マレーシア、フィリピン、アメリカの各代表と国内ルーテル四派からの参加者を交え日本では初のルーテル諸派合同の女性会議となった（実行委員長JELC婦人会連盟会長石原京子、参加者は二会場で約一五〇名）。JELC外の教会は女性接手を認めていないため、二会場ではいずれもその促進が強調されたが、声明文の中には「グローバルな課題を認識し解決するための交換プログラム」、また「古い社会や教会構造の変革に努める」等、世界的視野からの新たな決意が示された。こうして女性の信徒運動は多方面でよりエキューメンカル性を強めている。

連盟は一九九三年、JELC宣教百年を記念し、アジアの神学生のために献金（目標百万円）を捧げる。

むすび

かつて幼なかつた婦人会も、今や靈的にも活動面でも教会の平均性をしのぐようになった。

女性の信徒運動体は、教会の内になりながら、外の目を共有することにおいて成長してきた感がある。二千年前、復活の主にまみえた女性たちから、女性たちへと、伝えられてきたキリストの愛は、今も自然に女性の中に息づいている。この愛が女性信徒の連帯と動員を促していると思われる。

「土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる」マルコ四・二八
以上

(注)

- 1 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』（東京大学出版会 一九九二年）二六五頁〜。
- 2 同、一八六〜一八七頁。
- 3 『博多ルーテル教会八〇年史』（博多ルーテル教会八〇年史編集委員会 一九八九年）二二頁〜。

- 4 ピーリー著、青山四郎訳『日本伝道開始の記録』（グロリア出版 一九八二年）一六頁。
- 5 『日本福音ルーテル教会百年史論集第3号』（百年史委員会 一九九〇年）四四〜四五頁。
- 6 『ルセラシオン・ヴィジター』（米国南部一致ルーテル教会機関紙 一九九九年五月四日号）。
- 7 ピーリー著、青山四郎『日本伝道開始の記録』九一〜九二頁。
- 8 井上三郎『福音ルーテル教会史』（日本福音ルーテル教会東信北部会 一九五九年）一四頁。
- 9 日本福音ルーテル教会「第二回教会總會記録」（一九二一年）九〜一〇頁。婦人伝道委員会は婦人事業部の前身と考えられる。
- 10 同。「第八回教会總會記録」（一九二七年）四二〜四三頁。
- 11 『路帖新報』第二号（一九〇二年七月一〇日）。
- 12 教会總會記録以外に個教会の教会史にはさらに多くの女性教師名が記されている。
- 13 モード・パラウス著、稲富いよの訳『愛と福祉のはざまに』（聖文舎、一九七九年）。今村登志『緋薔薇—エカード先生の思い出』（日本福音ルーテル室園教会、一九七六年）。今村登志「マリアン・イ・パッツ先生の思い出」（JELC 百年事業室所有）。
- 14 岸千年『み手に導かれて—信仰自伝』（聖文舎、一九八八年）一八頁。
- 15 「第九回教会總會記録」（一九二八年）六五頁。
- 16 同、婦人文書委員会報告、五〇〜五二頁。『ミニッツ』（宣教師会年次報告書 一九二八年）四六頁。
- 17 婦人会連盟「第一回大会記録」（一九二八年）。『るうてる』二〇四号（一九二八年五月一五日）。福山猛編『日本福音ルーテル教会史』（ルーテル社 一九五四年）二八五頁〜。
- 18 同。但し、『日本福音ルーテル教会史』に会費一ヶ月五十銭とあるのは五銭の誤り。
- 19 『ミニッツ』（宣教師会年次報告書 一九二八年）九、二五〜二七、四六〜四八頁。

- 20 「第九回教会総会記録」(一九二八年) 行政委員会報告三七頁。
 福山猛編『日本福音ルーテル教会史』二九二〜二九四頁。
- 21 同。四〇六頁。
- 22 婦人会連盟「第一回大会記録」(一九四九年)。同『会報』五〇号、八八号(一九七五年九月一日、一九八八年九月一日)。
 福山猛編『日本福音ルーテル教会史』五〇六頁。『るうてる』第二卷第五号(一九四九年五月一日)。
- 23 井上三郎『福音ルーテル教会史』九一〜九二頁。婦人会連盟「第三回大会記録」(一九五四年)八八、一一五頁。
- 24 KOSKENNIEMI LAURI 'EVANKELIUMI JAPANIN' (フィンランドルーテル福音協会出版社 一九九二年)。
 石坂真砂姉に山県インタビュー(一九九二年八月二九日 於豊島区老人ホーム「山吹の里」)。
- 25 河島亀三郎『東海教区二十年史』(日本福音ルーテル教会東海教区 一九七一年)三〇頁〜。
- 26 本教会事務局保存「岸井資料」より。
- 27 婦人会連盟「第七回大会記録」(一九六六年)三四〜三八頁。『会報』二二二号(一九六五年八月二五日)。
- 28 「第一一回教会総会記録」諸委員会報告、六(一九八四年)一〇頁。
- 29 「第一三回婦人会連盟総会よりの要望書に対する回答」(一九八四年、第一〇期第七回常議員会)。
- 30 常議員会書記より連盟会長宛の公文書(一九九〇年七月五日付)。
- 31 婦人会連盟「第三回リーダー研修会報告」(一九九一年)四三〜四五頁。
- 32 「第五回韓国/在日/日本女性神学フォーラム記録」(一九九二年二月二〇〜二二日 於韓国基督教百周年記念館)。
- 33 LWF『WICAS (教会と社会の中の女性)』三七号(一九九二年五月)。
- 34 ※教会総会は、一九三一(昭六)年までは原則として年会と称されているが、保存資料のタイトルは「総会記録」「年会記録」の両方が用いられているため、この(注)では「総会記録」に統一した。

付表Ⅰ 日本福音ルーテル教会婦人会連盟略史

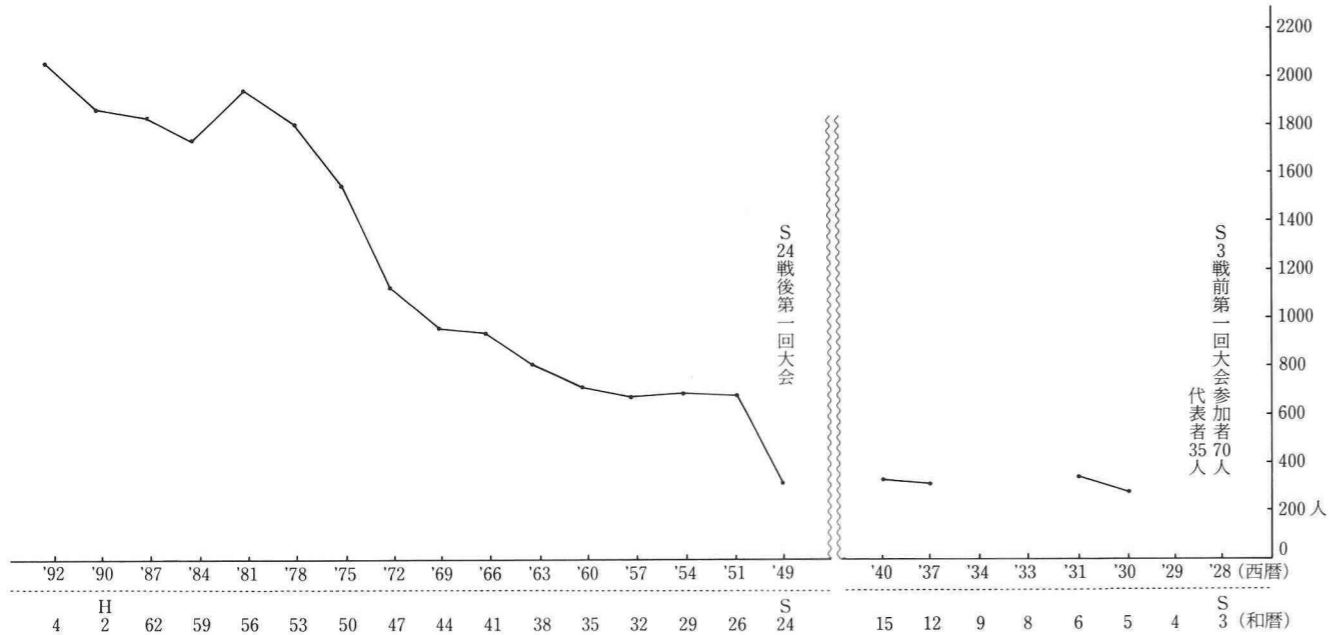
(資料は日本福音ルーテル教会史へ、つづける、婦人会連盟総大会記録、会報、百年史委員会資料、その他。数字は資料により差があるため、概算で出ている年もある。戦前大会は第8回が最後。文書委員は戦後6回大会より役員へ。協力委員は戦後3回大会までは顧問。空欄は資料不足のため不明)

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	戦後1	8	7	6	5	4	3	2	戦前1	総 会 数		
1990 H 2年10月	1987 62年10月	1984 59年 9 月	1981 56年 9-10月	1978 53年 9 月	1975 50年10月	1972 47年10月	1969 44年 9 月	1966 41年 8 月	1963年 38年10月	1960 35年10月	1957 32年10月	1954 29年 9 月	1951 26年 9 月	1949 24年 4 月	1940 15年 5 月	1937 12年 5 月	1934 9 年	1933 8 年 5 月	1931 6 年10月	1930 5 年10月	1929 4 年10月	1928 3 年 4 月	西和 歴 暦		
大阪 デン パレス	静岡 東山荘	福岡、 志賀 久志館	東京、 本 日 青年館	近江八幡 民村 休暇	静岡、 天城山荘	博多、 志賀の島 国民宿舎	神戸、 須磨荘	東京、 本 日 青年館	東京、市ケ 谷ユース ホテル	熊本教会	大阪教会	博多教会	東京教会	九州 女学院	下関教会	京都教会	大牟田 教会	東京教会	門司教会	博多教会	久米 米 教会	熊本教会	開 催 地		
283	441	431	418	306	288	197	201	140	274	205	149	147	140	103	45	50	40	70	60	57	63	70	参加人数(約)		
126	128	124	126	119	117	110	101	92	73	61	52	42	34	32	25	22			23	21		19	加入教会数		
1,848	1,818	1,714	1,927	1,805	1,546	1,152	963	958	802	709	634	684	677	324	351	315			353	296			総会員数(約)		
行つて 見よ よ	みことば と行い て来よ よ	キリスト こそ平 和をつ くり出 す人 隣りと 共に	平和をつ くり出 す人 隣りと 共に	恵みに 応えて アジア に生 きる	共に生 きる 目を 広く 世 界に	主の働 き人。	聖言に 固く立 ち 前進し よう。	現代に 生きる キ リスト 者婦 人の 責任。	みこと ばに 生き る 婦人 会連 盟。	宣教二 世紀へ 感謝 して進 もう。	主にあ つて喜 ぼう。	奉仕の 精神。	神に依 る協 力。	聖国を 来らせ 給え。	(主の事 を 務 む。 田坂 博巳)	説教 岸 千 年	(起きよ。 説教 岸 千 年)	(婦人の 使命。 説教 三浦 丞)	(聖徒の ための 祈り。 説教 稲留 肇)	(神の国 運動に おける 婦人の 任 務。 説教 高島 貞久)	(我等は 何を 為 すべ きか。 説教 岸 千 年)	(主は来 りて 汝 を呼 び給 ふ。 説教 稲留 肇)	(戦後9 回大 会以 降は その 期の 主題)	主 題	
出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	主 な 決 議 事 項 ()は主なきこと。	
1,200	1,200	800	800	800	500	300	300	200	200	240	180	180	120	60円	1円20銭							1円20銭	60銭	年 会 費	
石原	石橋	徳善	矢野	西	岸井	岡	船津	内海	平井	辛木	岸	稲富	岸	三浦	米村	米村		高島	石松	石松	米村	米村	会長	連 盟 役 員	
星野	水野	白川	小泉	宝珠山	矢野	佐々木	星野	留川	青山	平井	三浦	岸	三浦	稲富	宮本	宮本		野中	野中	稲富	稲富	本 田	副 会 長		
川口	井上	星野	竹内	大柴	石橋	白川	内野	松岡	延満	青山	平井	辛木	平井	岸	吉田	吉田		多紀	宮本	宮本	長尾	長尾	書 記		
嶋	武村	安藤・松原	長谷川	内田	飯野	神原	佐々木	保坂	大野	中野	大野	平井	青山	川瀬	妹尾	妹尾		乾	井上	井上	岩重	近藤	会 計		
谷口	山 県	岩 月	柏 田	佐 藤	水 野	前 田	保 坂	船 津	喜 志	岸、三浦 他 4 名	稲富、牛丸 他 4 名	三浦、岸 他 4 名	稲富、辛木 他 4 名	パッツ 他 4 名	三浦、岸 他 3 名	岸、田坂、 三浦、大 熊		逸山 他 4 名	稲富、岸 高 平島	稲富、岸 高 平島	稲富、石松 ノルマン、 パッツ	稲富、石松 ノルマン、 パッツ	文 書		
中山 他14名	西 他 9 名	カ タ ヤ ポ ー マ ン	カ ニ ン ハ ム オ ル	ネ ー ビ ー ア イ モ ン	ウ エ ン ツ 他 3 名	タ フ 他 3 名	デ ー ル 他 2 名	デ ー ル サ	ア ル ス ド ル ク 他 3 名	ジ ョ ン ソ ン 他 3 名	ハ ー ダ ー 他 3 名	シャ ー ク ウ イ ン テ ル	エ カ ー ド パ ウ ラ ス	エ カ ー ド ミ ラ ー				エ カ ー ド リ ッ パ ー ド	エ カ ー ド シャ ー ク			協 力 委 員			
150万	160万	205万	80万	66万	56万	30万	23万	14万	21万	43万	5.5万	5万	4.3万	2.4万	113円	118円				145円 22銭	156円 90銭		感 謝 献 金 (約)		
金、内外 研修費	連盟事務局、 ブラジル伝 道、るるる のホーム、 女性、教職 夫人援助	カルカッタ 路上学校、 内外研修立 立、広安愛 児園、釜ヶ 崎酒害セン ター。	外研積立、 広安愛児園 にミルクを 客、アジア へ、赤ちゃん の。	飢えのため、 もう一人の 客、アジア へ、赤ちゃん の。	九州シオン 園。	ブラジル、 神学生、 教職 未亡人、る るるるの ホーム	大垣あゆみ の家。	ブラジル、 神学生、 教職 未亡人、る るるるの ホーム	仙台鶴ヶ 谷希望園。	ブラジル、 新会堂、 教職 未亡人、る るるるの ホーム	金、教職未 亡人福祉積 立。	るるるる のホーム、 新会堂、 ブラジル 伝道、ガ ウン献 金、教職未 亡人福祉積 立。	連盟ホ ーム。	女子神学 生、卒業 神学生ガ ウン。	女子神学 生。	女子神学 生。	女子神学 生。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	女子神学 生、教職 未亡人、 福祉積立 。	支那ミッ ション小 学校、支 那ルーテ ル教会婦 人会、支 那内地伝 道。	主 な 献 げ 先
95号～	86号～	77号～	68号～	59号～	51号～	41号～	31号～	25号～	18号～	11号	S30第1～4号るるる付録 S33第5号～ 独立会館		S. 2～S.29 (「るるる」婦人欄)		途中一時中断)						会 報				

期	年	月	主 題	各 年 主 題	会報(号)	聖 書 研 究
1	1949	・4	聖国を来たらせ給え (50号記念号による)	神国建設		
2	1951	・9	神に依る力	神の国の拡張		
3	1953		奉仕の精神	主の道のあらわれんために 世の光なるキリスト		
4	1955	・9	主にあつて喜ぼう	神の栄光の誉れとならんために 信仰の善き戦いをたたかわん	1・2・3	テモエI エペソ・ローマ
5	1957	・10	宣教二世紀へ感謝して進もう	一致と教会生活	5・6・7	エペソ
6	1958	・10	キリストによる新生と一致	信仰と教会生活	8・9	ヨハネ
7	1960	・10	みことばに生きる婦人会連盟	スチュワードシップ	10	ガラテヤ ヨハネII III
8	1962		現代に生きるキリスト者婦人の責任	宣教二世紀へ感謝して進もう	11・12	ヘブル
9	1964	・10	聖言にかたく立ち前進しよう	神の喜びたもう歩み	13・14・15	使徒行伝
10	1966	・8	主の働き人	イエスを仰ぎ見つつ キリストによる新生と一致	16・17	黙示録
11	1967	・9	共に生きる——目を広く世界に——	福音を地の果てまで 永遠の命とを	18・19・20	ガラテヤ
12	1968	・9	恵みに応えて——アジアに生きる——	福音の命とを	21・22	ヨハネ
13	1970	・10	平和をつくりだす人 隣り人と共に	愛の交わり	23・24	ヨハネII III
14	1972	・10	みことば行い——来て見よ、行つて告げよ——	御国の民としての御約束	25・26	黙示録
15	1973	・10		福音のあかし	27・28	使徒行伝
	1974	・10		御国の民としての御約束	29・30	使徒行伝
	1975	・10		福音のあかし	31	使徒行伝
	1976	・10		御国の民としての御約束	32	使徒行伝
	1977	・10		福音のあかし	33	使徒行伝
	1978	・9		御国の民としての御約束	34	使徒行伝
	1979	・9		福音のあかし	35	使徒行伝
	1980	・9		御国の民としての御約束	36	使徒行伝
	1981	・10		福音のあかし	37	使徒行伝
	1982	・10		御国の民としての御約束	38	使徒行伝
	1983	・9		福音のあかし	39	使徒行伝
	1984	・9		御国の民としての御約束	40	使徒行伝
	1985	・9		福音のあかし	41	使徒行伝
	1986	・9		御国の民としての御約束	42	使徒行伝
	1987	・10		福音のあかし	43	使徒行伝
	1988	・10		御国の民としての御約束	44	使徒行伝
	1989	・10		福音のあかし	45	使徒行伝
	1990	・10		御国の民としての御約束	46	使徒行伝
	1991	・10		福音のあかし	47	使徒行伝
	1992	・10		御国の民としての御約束	48	使徒行伝
	1993	・10		福音のあかし	49	使徒行伝

(注) 1、資料は「大会記録」「しおり」「会報」によった。但しこれらの三者の間で、内容が異なっているケースが数例ある。
 2、主題は8期までは「大会記録」の冒頭に記されているものを、9期からは実質的内容を重視して、その期の主題をかかげた。
 3、「大会記録」の冒頭に記されている主題について
 各大会記録の冒頭に記されている主題、すなわち大会用に用意された主題の決め方は一定していない。
 ・総大会開催者である前期役員会が新しい主題を用意。(例2、3、4、7、15回)
 ・前期3年目の各年主題をそのまま用いる。(例5、6、9回)
 ・前期総主題をそのまま用いる。(例10~14回)

図1 日本福音ルーテル教会 婦人会連盟総会員数



東海教区の信徒の働きと教区形成

山本 裕

序

東海教区の前身は、東海福音ルーテル教会であり、そのまた前身は、アメリカ・ミネソタ州に本部をおく Evangelical Lutheran Church (E L C) の日本伝道部 (福音ルーテル教会日本伝道部) である。河島亀三郎牧師は、その著「東海教区二〇年史」で、次のようにいう。

「一九四九年 (昭和二四年) 一月五日、二〇年の第一ページはこの日に始まる。この日、ノーウエスト航空機で羽田に降り立った一人の宣教師がある。それは、福音ルーテル教会から日本伝道のために送られた、オラフ・ハンセンであった。たった一人で、未知の国、かつての交戦国であったこの日本へ、福音宣教の使命を帯びて渡ってきたのだ。」(四頁)

次の年、(一九五〇年) 二月、ハンセンの家族と二人の婦人宣教師 (B・ポイヤム、L・ハンソン) が横浜に着いた。更に当時の日本福音ルーテル教会総会議長平井清の紹介で、河島亀三郎がハンセンに会い、その年 (一九五〇年) 三月一四日、同牧師は上京し、日本伝道部の働きに参加した。

かくて、日本伝道部としての最初の礼拝が行なわれたのは、一九五〇年四月二日棕櫚主日であった。場所は、東京

都文京区丸山町二一番地の、元医院洋間（ハンセンの最初の住居）である。

一、福音ルーテル教会日本伝道部の働き

当時の日本伝道部の伝道方策についての資料を今日手に入れることは難しいが、しかし、今振り返ってみる時、明らかに以下三つのポイントが、クローズアップされる。そしてこれはすべて、信徒の働きと深くかかわっている。

【一】五つの拠点教会

まず、日本伝道部は、宣教の基盤教会として、五つの地域に伝道の拠点を置いた。それぞれが、当初から深く地域在住の信徒と牧師に結びついていた。

①東京教会（現小石川教会）

伝道開始：一九五〇年四月二日 献堂：一九五三年七月一〇日 協力者：西恵三、岸井敏

西恵三については、百年史論集第一、第二、第三号（エッセイ）に詳しい。岸井敏については、東京教会最初の受洗者（一九五二年三月二五日・イースター）であり、後に献身し、日本伝道部をあらゆる面から支えた。

②静岡教会

伝道開始：一九五一年九月三日 献堂：一九五二年三月二〇日 協力者：鈴木宏

鈴木は「聖霊の歩み」（日本伝道部、伝道十周年記念史）によれば、一九三九年（昭和十四年）中支（現中国）で、婦人宣教師リディア・ハンソンと出会い、聖書を学んだ。戦後、中国から帰国した彼は、再びこの日

本でそして静岡でハンソンに会うこととなった。神の不思議な御手に驚き、それ以後、日本伝道部との協力が始まった。

③ 浜松教会

伝道開始：一九五一年一月一日 献堂：一九五二年七月十三日 協力者：柳田秀男

柳田牧師との協力については、西恵三による百年史論集第一号（エッセイ）に記されている。尚、前記「聖霊の歩み」で、西恵三は次のように記す。

「私が浪速高等学校の学生だった時、約一ヶ月間、浜松の柳田（同志社大学で私の父の後輩にあたる人）のお宅で世話になったので、そのことをハンセン氏に話したら、それでは浜松から始めよう（調査）ということになったのです。」

④ 島田教会

伝道開始：一九五一年九月三日 献堂：一九五二年三月三〇日 協力者：市山貞一

前記「聖霊の歩み」において、市山は次のようにいう。

「一九四九年（昭和二十四年）の夏、新伝道地物色に歩いておられたハンセン先生と西さんが、島田の教団教会から廻されて、私を訪ねて下さいました。色々話される中で、私どもの願いも申し上げました。……一九五一年にはステンバーグ、ミツチエル先生が共に赴任してこれ、第一回の礼拝が子供を加えて数人で私どもの二階でもたれました。」

⑤ 恵教会

伝道開始：一九五一年九月三日 献堂：一九五二年三月三〇日 協力者：大柴俊和、太田正巳

大柴は「聖霊の歩み」によれば、大学を卒業し、名古屋に就職、五一年九月、背の高い外人（G・タング）

と出会い、土、日曜にかけてさまざま協力、奉仕、やがて献身をする。太田は、現恵教会土地所有者であった。タングとの交わりの中で、家族全員が求道、やがて洗礼へと導かれた。太田夫人は、次のように書く。

「一九五一年一〇月二一日の日曜日、我が家は朝早くから落ち着くことができませんでした。といいますのは、この地における、恵福音ルーテル教会の最初の礼拝式が、我が家で行なわれるからです。」（恵教会一五周年記念誌）

以上のように、五つの拠点教会は「聖霊の導き」としかいいようのない不思議な協力者との働きの中で、神の宮が建てられていった。初期におけるこのような信徒との深い関わりに注目したい。

[注]

尚、これら教会以外にも、農村伝道に特別な使命をもった、R・イングスルードは、浜名湖畔を毎日伝道用自動車を運転して走り回った。その時、彼の協力者になったのが、当時静岡県立三ヶ日高校の英語教師であった中島誠であった（浜名湖伝道：一九五三年一〇月開始）。彼は、次のように語る。

「イングスルードと出会って約一年、浜名湖畔の村や町を伝道して歩き、……聖書研究会・礼拝・伝道映画会などを定期的に行なうようになり、私自身も教師をやめて、伝道の仕事に飛び込みたいと思うようになりまし

た。昭和三〇年三月六日、長男が生まれました。私はその日、聖書マタイ五章を読んでいましたが『あなたがたの光を人々の前に輝かせ』という聖句に励まされ、長男の生まれた時をきっかけとして伝道者になることを決心しました。学校側も啞然とし、妻も驚き、友人たちも猛烈に反対しました。今になれば懐かしい思い出ですが、当時は大変でした。」（河島「東海教区二〇年史」一五頁）

また、豊橋には、R・ネルソンの協力者として、元海軍中将、大林清がいた。彼は、ネルソンの通訳者として

立ち、豊橋伝道の中核となっていた。

【二】 バイブルキャンプ・梅ヶ島キャンプ場

① 第一回バイブルキャンプ (一九五二年八月二八日、二九日) 山中湖 Y M C A

第二回バイブルキャンプ (一九五三年八月) 山中湖 Y M C A

第三回バイブルキャンプ (一九五四年七月三〇日) 東山荘

② 梅ヶ島キャンプ場 (一九五五年七月一九日・献堂)

敗戦後の混乱時代、み言葉を聞き、讚美歌を歌い、キャンプファイヤーをするこのようなバイブルキャンプは、当時の人々にとって、非常に新鮮であり、魂の渇きを癒すものであった。また、宣教師たちのジョークに満ちた話や笑顔は、人々の暗い心を明るくするものであった。

梅ヶ島キャンプ場は、標高千メートル、夏も寒いところにある。交通の便悪く、日本人としては、到底キャンプ場として考えられないような所であったが、山を削り、平らにし、運動場を造り、そして、その両側にキャビンをつ造った。一九六三年の統計でみると、一夏で四百人の人々がこのキャンプ場でみ言葉を聞き、祈りの時、交わりの時をもつたとある。(一九六三年九月三日・第七回教区伝道部報告)

キャンプ場は、

- 1、各地の教会の信徒、求道者が一堂に会し、生活を共にする「み言葉による学びと交わりと訓練」の場であった。
- 2、キャンプでのこの学びと交わりは、山を下り、各教会に散らされた後も、深い「信仰の連帯」を生んだ。

3、キャンプ場は、毎年毎年「新しい出会い」の場となった。毎年来る人も、始めて来る人も、新鮮な出会いをその年ごとに経験した。

4、キャンプを通して、若い「梅ヶ島カップル」が数多く誕生した。今彼らが各教会の中核となり、またその子供たちが梅ヶ島キャンプに参加、あるいは、奉仕者となっている。その意味で「信仰の継承」の場でもあった。

教区における信徒の働きと交わりにおいて、このキャンプ場の果たした役目は計り知れないものがある。岸井敏は、「聖霊の歩み」において、次のように記す。

「山くずれのためバスが難行しても、そしてまた台風のために日程の変更が余儀なくされても、常にキャンプは若者の心の故里であり続けた。」

【三】東海ルーテル聖書学院

①学院の沿革―第一〇回教区総会報告による

・宣教師会議において設立決定 (一九五一年一月二五日～二八日)

・院長にハイランド就任 (一九五三年八月～一九六五年三月)

・献堂 (一九五四年三月)

・開校 (一九五四年四月)

・院長に岸井敏就任 (一九六五年四月～一九七四年三月)

・創立一五周年記念式 (一九六九年四月二九日)

卒業生二一〇名 「男八八人、女一二二人」

・閉校
〔そのうち、牧師一人、神学生一人、伝道師四人、牧師夫人一人〕
(一九七四年三月三一日)

二〇年間の在籍者数 合計三三九人

「一年の全課程を学んだ者二〇三人、一部聴講した者八〇人、二年課程を学んだ者五六人」

②信徒教育の場として

東海ルーテル聖書学院は、日本伝道部によって「信徒教育の場」として設立された。初代院長のハイランドは次のように言う。

「日本はキリスト教会の数が少数ですから、特に教会が神の言葉に根ざすことが大切になってきます。ですから、福音ルーテル教会の日本伝道の初期において、クリスチャンが妨げられずに神のみ言葉を充分に学ぶ場として聖書学院を設立する計画が立てられたのです。」(「聖書の歩み」より)

敗戦後の困難な時期にあつて、一年間仕事や学校を離れ、ここに来ることは大変であつたが、午前中の授業、午後のアルバイトという形での「学びと訓練」、そして教師共々、寝食を共にしての交わりは、当時の学生にとって、得がたい信仰上の経験であつた。

聖書学院は信徒教育を目指したものであつたが、この学院を通して「伝道者」が出てくるといふ祝福が与えられた。岸井敏は次のように書く。

「キリスト者に聖書を組織的に学ばせ、それと共に信徒の交わりの中にあつて、主イエス・キリストとの深い個人的な関係を確立させ、その結果、自己の人生に対する神のみこころとご計画を知つて、それぞれの教会や地域社会で奉仕と証しの場を見出せるよう指導すること……その他に福音伝道者の訓練施設としての役割

を果し、神学校入学希望者のために基本的聖書知識を与える機会を作ること。」(第十回教区総会報告より)
 前記の通り、創立一五周年の段階で、男子生徒八八人中二八人が教職を目指したことは特筆に値する。
 聖書学院は教区内の真中に立地し、宿泊施設も整っていた事もあって、人的交流における「教区連帯の要」の役割を果していた。この学院を通して「総会」「聖書講座」「教会学校教師研修会」「青年の集まり」など、様々なプログラムがなされ、共に食し、共に語り、共に祈る、有形無形の信徒の研修の場となった。梅ヶ島キヤンプ場と共に、この学院は教区内各教会の魂の故郷でもあった。
 以上のように日本伝道部の働きの初期における重要な三つのポイントは、すべて信徒の「教育、訓練、奉仕」にあった。これらのことがその後の教区内での信徒の働きと教区形成にとって、大きな土台石となったのである。

[注]

- 一九六〇年(昭和三五年) 七月九日 ・東海福音ルーテル教会設立
- 一九六三年(昭和三八八) 五月三日 ・日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との合同
日本福音ルーテル教会東海教区となる。
- 一九六五年(昭和四〇年) ・教区婦人会結成(総会員数、一八六名)

二、東海教区信徒会 ——アスマラ発言を契機として——

【一】アスマラ発言

一九六四年四月一六日〜一八日、エチオピア・アスマラで行なわれた、JCM会議において当時の日本福音ル

ーテル教会総会議長、内海季秋は、一九七四年末までに日本福音ルーテル教会の第一予算（教職、職員、給与関係）の自給達成を表明した。当時の教区長中島誠は次のように書く。

「このこと（アスマラ発言）は当然のことであると同時に驚くべきことであり、喜ばしいことであると同時に厳しいことであると言わねばならない……一九七四年という期限が明らかにされたのは、我々の働きにおいてなしうる限りの努力を傾注するという決意と約束が明示されたことなのである。」（「第七回教区総会報告」）

アスマラ発言以後、教区としては一九七四年に対応するために「教区自立伝道について——今、何をしなければならぬか」の主題のもと、教職退修会（一九六九年一〇月一三日～一五日）をもち、教区自立に向けて、いくつかの提案と決議をなした。同時に中島教区長は、信徒協議会結成を思考した。七四年にむかう時、信徒の力が結集が不可欠であると判断したからである。

「教区自給という重大な課題を前にして、我々が厳しく振り返らなければならない現実のひとつは、果して、我が教区の各教会信徒が十分に現状を把握しているかどうか、一九七四年自給のためにどのような具体的な心がまえを持っているのか……」（第七回教区総会教区長報告）

【二】信徒協議会

①第一回信徒協議会準備委員会（一九七〇年一月一五日）

中島教区長のもと、小島（沼津）、長浜（岡崎）、松井（恵）、赤塚（ひかり）の四氏を集め行なわれた。同委員会議事録によれば以下の通りである。当時の様子が鮮明である。

「七四年教区自給の命題をふまえ、私共信徒一人一人、教会を喜びの教会たらしめるために『何が出来る

か、何をしなければならぬか』協議すべき事柄は多くあります。この協議会で話し合われたことを教区総会に反映させ、とかく事務処理的な問題に終りがちな総会を、伝道のためのものにしようではありませんか。」

②第二回信徒協議会準備委員会（一九七〇年三月八日）

先と同様、浜松教会にて、更に多くの委員を集め開かれた。出席者と、協議され決定されたことは以下の通りである。

出席者：中島牧師、山本牧師、伊藤（静岡）、小島（沼津）、松原（復活）、松井（恵）、矢野（名古屋） 中田

（沼津）、大坪（鷺津）、長浜（岡崎）

主 題：「現代の認識と信徒の自覚」（発題「七四年教区自給と信徒の決意」山本裕伝道部長）

分団内容：1、自給問題（特に二種、三種教会の将来について、伝道師謝儀・宣教師と教会の関係）

2、自給問題と信徒養成の問題

3、自給問題と本教会及び教区の行政機構改革

4、自給問題と牧師厚生施設の問題

5、自給問題と一種教会の今後の責任

分団内容でもわかる通り「自給問題」を柱にして、すべての問題が改めてチェックされ再構築されようとしていた。その中において信徒の働きが大きく取り上げられている。

③信徒協議会（一九七〇年三月二日）

このような準備の後、静岡教会で信徒協議会が行なわれた。協議会開催通知は以下の通りである。

「一九七四年教区自給の命題を踏まえ、私共信徒一人一人の今しなければならぬことは何か、しなくても

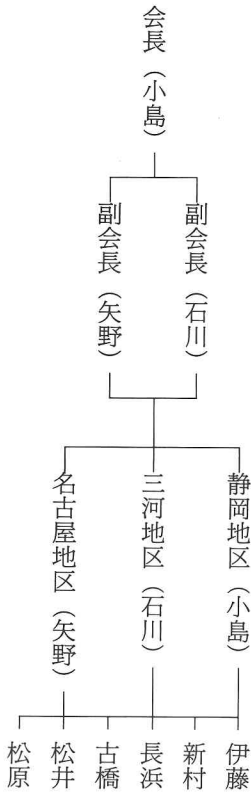
よいことは何か、或いは、従来、とかく各個教会の問題にのみ追われる傾向にある私共ですが、広く、教会全体に関心を持ち、互いに近隣教会の重荷を負いあうために、充分な対話がなされなければなりません。また、伝道の教会形成の責任を牧師のみに負わせ勝ちであることを省み、信徒もその一端を担うべく語り合いたいと思います。

かつ、又、今回の必要にせまられて開かれたかの感をもつ信徒協議会が信徒の連帯と交わりを強めるために信徒会というものに発展することを期待し、望むものです。

出来るだけ多数の信徒、オブザーバーとして牧師の参加を期待いたします。」

東海教区信徒協議会準備委員会 小島 鎮 長浜 耕 松井 芳一 赤塚 渾
 尚、同日提案された「東海ルーテル信徒会」組織概略は次の通りである。そしてこれは、三月二二日から行なわれた第七回教区総会に報告された。

1、名称 「東海ルーテル信徒会」
 2、組織



- 3、区域 静岡地区・静岡、島田、浜松、湯河原、富士、小鹿、下土狩、清水、藤枝、菊川、小田原、ひかり
 三河地区・豊橋、岡崎、刈谷、浜名、田原、高師、三ヶ日、掛川
 名古屋地区・名古屋、恵、岐阜、復活、半田、柴田、常滑、大垣、希望、高蔵寺
- 4、目的及び任務

信徒として次代に生きる教会への奉仕・信徒活動の積極的展開・信徒の親睦

- 5、総会 毎年一回、会長が招集する。

- 6、行事 宗教講演会・社会奉仕活動・教会への財政的支援

④教区規則凍結と信徒会

この第七回総会で「七四年末自給達成時まで教区規則を一部凍結し、常議員会構成を三ブロックにわけ、各ブロックにより信徒一名を選出すること」が、提案可決された。(すべてが七四年自給という大命題にむかって動き出している)。ただ、そのブロック分けは、信徒数による単純計算であった。

東ブロック(小田原―菊川) 一三教会、信徒数・三三八人、

中ブロック(掛川―刈谷) 一〇教会、信徒数・三六四人

西ブロック(半田―大垣) 一〇教会、信徒数・四〇六人

信徒常議員候補二名の中、一名は信徒会役員の推薦であったが、選挙の結果、信徒会役員は一名も選出されなかった。凍結してまで教区組織を機能化しようとしたが、新常議員会と信徒会との間に歯車があわず、信徒会の動きは事実上ストップしてしまった。(理由として、七四年自立に向かつての唐突な信徒会結成、更には、新常議員会の関心が七四年自給への財政的対応に追われたことなどがあげられる。)

三、信徒大会の歩み —— 一九七四年教区自立から ——

アスマラ発言で約束された自立の年、一九七四年が来た。信徒の動きとしてもひとつの転換期となる年であった。

① 第一一回教区総会報告によれば（一九七四年三月二一日）信徒会の新たな動きが次のように記されている。

「一九七〇年の総会で結成された信徒会が、その後充分な働きを果していないことを反省し、新たに壮年会の発起人會を作る準備が進められている。この様な信徒會の働きは、教区の伝道を強力に推進するためになくてはならぬものである。」

この動きは総会後に引き継がれていった。

② 一九七四年四月から教区の歩みは大きなステップを踏み出すこととなった。今まで沈滞あるいはバラバラであった動きが目に見える形でひとつずつ組織化されていった。第一回教職會が一九七四年一〇月二九日〜三〇日行なわれ、また、第一回信徒大会も一九七四年一月三日〜四日に行なわれ、さらに、青年連絡協議會も発足した。七四年自立を契機として、各會の動きが自らの事として始まったと言つてよい。

第一二回總會（一九七五年三月二一日）報告書で緒方一誠教区長は次のように書く。

「教職自らが自己の弱さと限界の中で苦闘しつつ、それにも関わらず、尚支えて下さる神の恵を身をもって証しすること、つまり教職自らの人格を深め、高めていく。そして整えられた信徒の群れが奉仕の業をなし、キリストの身体をたて、遂にキリストの満ち満ちた徳の高さまで完成させていくこと……」

ここで、「信徒の群れを整える」ことにすべてを集中するよう語りかけている。

③特に、第一回信徒大会について書いてみよう。

主題 「東海教区の伝道及び奉仕」

委員長 長浜 耕（岡崎） 実行委員 二一名

場所 名古屋金山プラザ 出席者 一〇五名

第一二回総会（七五年）報告書には以下のように記されている。

「第一一回定期総会で七四年の大きな課題は信徒教育であり、そのために壮年会、婦人会、青年会の組織を固め、信徒教育を徹底し、意識を高める必要があること……。教区信徒会は壮年、婦人、青年の各層からなる全信徒参加の信徒運動であるべきこと。」

この第一回信徒大会開催にあたっては、実行委員二一名（各ブロックより）を数え、大きな希望と祈りをもつて準備し、信徒の手ですべて運営をなした画期的な出来事であった。教区の信徒の働き、信徒運動の歩みは、新たにこの時から始まった。

④そして七四年以後の教区形成は、この信徒大会を軸にして動いたと言っても過言ではない。というのは、教区を六地区に分けた地区宣教委員会が一九七九年に組織され、その地域における宣教責任を共に担うことが決議された（第一五回総会・一九七八年三月）。ついで一九七八年からの信徒大会はこの地区宣教委員会（大会委員長は信徒）が責任を負うこととなった。信徒大会開催にあたっては、地区内教会信徒が主となって準備（会場決定、講師選定、信徒大会ニュース発行、当日の受付、その他諸準備）、運営（会場におけるすべての責任、会食、茶菓、子供たちへのプログラム）そして終了後のまとめ（反省、会計報告、講演テープ）など、すべて責任をもつてなした。始めから終りまでの、信徒を中心とするこのような働きは、具体的に教会間の協力、連帯を呼びおこし、霊的にも組織的にも計りしれない信徒運動の場となったのである。この運動の遠因には、教

区草創期の三つのポイント（五つの拠点教会成立時の信徒の関わり、梅ヶ島キャンプ場、そして東海ルーテル聖書学院での学びと訓練）があることを私達は見落してはならない。もつと言えば、東海教区四〇年の歴史において、上記三つのポイントが底流となつて、今日の信徒大会を中心とする信徒の働き、運動があることを覚えていたのである。地区宣教委員会ごとの責任担当は上記のほか「教会学校教師研修会（毎年四月二十九日）」、「教区総会（毎年三月二一日）」がある。これらはローテーションを組んで、順次、各宣教委員会が担当することになった。これもまた、信徒の大きな働き、運動の場である。

⑤この様な東海教区の胎動の中で、一九八〇年三月第一七回教区総会で「東海教区総合宣教計画——一九八〇・宣教する神の民計画」が承認され、教区の歩むべき方向が明確に整えられた。教区形成は地区宣教委員会形成であり、それは又、各個教会の役員会形成であることを明確にし、各個教会の第一種教会成長へ祈りを合わせていった。さらに一九八九年三月第二七回総会では、今までの一〇年の歩みの上に立つて、「東海教区総合宣教計画——一九九〇・宣教する神の民計画」を承認した。現在、その歩みの途上にある。

⑥今後の問題としては、「信徒大会マンネリ化への危惧」、「東海教区信徒会」的な組織が必要か、或いはプロジェクトに対する「信徒運動体」としてあるべきか、さらには、信徒大会出席者が三〇〇名を越す今日の状況の中で組織、会場など具体的事柄への対応力等々の問題が出てくるであろう。しかし、二〇年も続いているこの信徒大会は信徒同士の共通の礼拝の場、共通の祈りの場、共通の学びの場、共通の問安の場、共通の情報交換の場として今後ますます教区内各個教会で必要なものとなつてくるであろう。信徒大会が一発花火的なものとして終るのではなく、日頃の地道な各個教会の礼拝、伝道、教育、奉仕、そして各地区宣教委員会の地道な語り合い、支えあい、その上に立つ信徒共通の場としての信徒大会——このような教区形成と信徒の働きが今後もなされ続けられるよう祈るものである。

⑦東海教区の母体である福音ルーテル教会日本伝道部（ELC）は、ミツシヨンの働きとして当然であろうが、最初からその地域の信徒との関わりを大切にし、そして福音伝道の歩みを続けてきた。この伝道は良きにつけ悪しきにつけ、今日の東海教区の中に息づいている。プラス面として指摘されるのは、初期から、信徒の教育、育成に重点を置いた方針である。そのひとつの結実として、今日の信徒大会があると言っても言い過ぎではないであろう。マイナス面としてしばしば指摘されるのは、教会形成における教会論の欠如である。「教会とはいったい何か」という問題が「アスマラ発言」で提示された時、各個教会の教会観、教会論の弱さが少なからず露呈された。ともあれ戦後、同じミツシヨンの、同じ体質を持つ宣教師たち、そしてそこから出てきた宣教方策によって形成された東海教区は、地理的、交通的條件の良さも手伝って、ひとつの大きなまとまりを見せていることは確かである。それが内に小さくまとまるのではなく、外に大きく飛躍するエネルギーとして神の働きに参加する教区となることを願っている。そのためには神の前に信ずる群れである我々が、絶えず新しくされ、ダイナミックに生きる「運動体」であることが重要である。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

（使徒言行録 一章 八節）

四、信徒大会の足跡及び教区形成の主要な歩み —— 一九回を歩んで ——

第一回 一九七四年一月三日

（名古屋・一〇五名）

（教区長・緒方一誠）

主題 「東海教区の伝道及び奉仕」

講師・教区内牧師 委員長・長沢 耕

実行委員・二二名

「第一一回定期総会で、七四年の大きな課題は信徒教育であり、そのために壮年会、婦人会、青年会の組織をかため、信徒教育を徹底し、意識を高める必要があること……。教区信徒会は、壮年、婦人、青年の各層からなる全信徒参加の信徒運動であるべきこと。」(第一二回総会報告書、一九七五年三月二日)

第二回 一九七五年九月二三日～二四日 (静岡・一一八名)

主題 「明日の教会作り、伝道と交わり」 講師・教区内牧師

第三回 一九七六年一月三日 (豊橋・一三二名)

主題 「伝道し奉仕する神の民の育成」 講師・教区内牧師

第四回 一九七七年一月三日 (名古屋・一六八名)

主題 「みことばに養われ、伝道する信徒」 講師・浅見正一牧師(札幌)

1、第四回までは信徒常議員が中心となり、その常議員の地区で会場を担当した。

2、地区宣教委員会(出席義務、牧師・代議員)が結成され、正式に第一五回総会(七八年三月二一日)より総会記録に報告される。

3、東海教区総合宣教計画が第一五回教区総会で承認される。

第五回 一九七八年一月三日 (静岡・一七一名) (教区長・山本 裕)

主題 「礼拝と式文」、「聖書講解」 講師・山田 実、清重尚弘教授(ルーテル神大)

この回から地区宣教委員会が責任を持つことになった。(大会委員長は信徒が担当)

第六回 一九七九年一月三日 [沼津・一五五名]

主題 「ルーテル教会信徒とは」 講師・賀来周一牧師(総会議長)

1、「東海教区総合宣教計画・一九八〇・宣教する神の民計画」承認

一九八〇年代の宣教計画を明確にし、向こう一〇年間の方向を策定し、第一七回総会(一九八〇年三月二〇日、名古屋)で承認を得た。

2、信徒育成に大きい影響があるCS教師研修会の第一回が「明日の教会を目指して」と題して、梅ヶ島で行なわれた。(一九七九年五月三日〜四日、二八名参加)以後、毎年行なわれている。

第七回 一九八〇年一月三日 [刈谷・一六四名]

主題 「信仰の継承」 講師・原田正治(ルーテル・アワー)

1、信徒大会で子供向けのプログラムを持つべきとの意見出る。

2、第二回CS教師研修会・十一月二三日〜二四日、デンマーク牧場、四七名参加(講師・アバコ)

第八回 一九八一年一月三日 [浜松・一五六名]

主題 「信仰の継承」 講師・有賀 寿(すぐ書房)

1、第一回韓国BOF(友情の架け橋)(八一年九月二一日〜一九日、二二名参加) BOF参加者が信徒大会で証しをした。

- 2、第三回CS教師研修会：一月二三日～二四日、五〇名（講師、アバコ）
- 3、教区宣教方策との関連から「宣教する教会の見直し」(Review)」案が教区総会で承認される。

第九回 一九八二年一月三日

〔名古屋・二二五名〕

（教区長・高塚郁男）

主題

「教会の成長」 講師・石橋幸男牧師（大阪）、池元祥（韓国ルーテル教会議長）

- 1、八一年の韓国BOF訪韓への感謝として、池議長以下、一九名を招いたことは大きい意味があった。
- 2、第四回CS教師研修会は他の多くの行事と重なったため中止した。

第一〇回 一九八三年一月三日

〔ひかり・二二二名〕

主題

「教会の成長、——日本の教会はなぜ弱いか」 講師・長谷川 保（浜松聖隷事業団）

- 1、一時マンネリ化しつつあった信徒大会に対し、第九回、第一〇回の準備委員会は、細心の注意を払い、準備、プログラムを進めた。例えば、各信徒代議員へのハガキによる意見聴取、各地区宣教委員への大会出席の協力方、教区婦人会連盟、青連協からの実行委員選出などである。

- 2、第四回CS教師研修会・四月二九日、豊橋、七一名（講師、教区内）

「東海教区教会学校連絡協議会」発足

第一一回 一九八四年一月三日

〔焼津・二〇二名〕

（教区長・長尾博吉）

主題

「教会を生み出す伝道」 講師・佐藤邦宏牧師（総会議長）

- 1、第五回CS教師研修会：五月三日、豊橋、五八名「いきいきとした分級をめざして」（講師、教区内）

「各教会で用いられている「教案」の調査がなされた。

2、ルーテル復活教会第一種教会承認（八四年三月二〇日第二一回教区総会）

第二二回 一九八五年一月三日 （岐阜・二〇〇名）

主題 「教会の成長——それを妨げるもの」 講師・壺阪国三牧師（日本キリスト教改革派・関教会）

1、第一一回の焼津、今回の岐阜などは教区内にあつても小さい教会であつたが、その教会が中心（地区宣教委員と共に）になってやることは負担と同時に大きな祝福が与えられた。報告書を通してこのことがよく示されている。

2、第六回CS教師研修会：四月二十九日、ひかり、九二名「明日の教会を目指して——教師の使命と分級の指導」

3、日本福音ルーテル教会と日本キリスト道友会の合同承認（八五年三月二一日第二二回教区総会）

4、第二回韓国BOF（八五年九月一三〜一七日、三二名参加）

第二三回 一九八六年一月三日 （恵・二五〇名） （教区長・明比輝代彦）

主題 「感謝と喜びに満ちた教職と信徒——限りある生命をいかに生きるか」

講師 K・デール教授（ルーテル神大）、善養寺康之（写真家）

1、人数が二〇〇人を越えてくると会場選定に大変苦慮する。今後の大きい課題である。

2、第七回CS教師研修会：四月二十九日、名古屋、八五名「教会形成における教会学校の役割と教会学校

教師の位置付け」 講師、篠田 潔牧師（日基・半田教会）

3、CS校長会：六月二九日、各ブロック毎で行なう。

第一四回 一九八七年一月三日 [静岡・二一〇名]

主題 「感謝と喜びに満ちた教職と信徒——主の恵を教えよう」

講師・辻 宣道牧師（日基・静岡草深教会）、新垣 勉（声楽家）

第八回CS教師研修会：四月二九日、静岡、「先輩からのメッセージ」 講師、飯田泰造（東洋英和短大）

第一五回 一九八八年一月三日 [藤枝・二五八名] (教区長・山本 裕)

主題 「私達が主の証人である——恵みを証しする教会」

講師・石橋幸男牧師（大阪）、演奏・ハンドベル、バイオリン他

1、講師選定の段階から地区が更に責任を負う必要があるとの意見が多くなってきた。信徒大会の意味が大きくなってきている。

2、第九回CS教師研修会：四月二九日、恵、八一名「今日と明日の教会学校を担う——CS教師をやめな

いんなら、やるつきやない」 講師、山田 稔牧師（日基・ひばり教会）

3、ルーテル清水教会第一種教会承認（八八年三月二日第二五回教区総会）

第一六回 一九八九年一月三日 [名古屋・二八六名]

主題 「生と死を考える」 講師 A・デーケン（上智大学）

1、八回にわたる準備委員会、三〇〇名収容の会場探しは大変な作業であった。しかしすべてが整えられ

た。特にこの地区（名古屋、岐阜地区宣教委）の信徒相互の連帯協力、それからでてくる企画、運営能力は大なるものがある。

2、第一〇回CS教師研修会：四月二十九日、ひかり「魅力ある礼拝、魅力ある分級」講師、木村誠甫（アバコ）

3、「東海教区総合宣教計画・一九九〇、宣教する神の民計画」の承認

一九八〇年の神の民計画の第二のステップとして九〇年代の計画を策定し、第二七回総会（一九九〇年三月二一日、浜松）で承認を得た。

第一七回 一九九〇年十一月三日 [刈谷・二七〇名]

主題 「み言葉、祈り、さんび、——今をどう生きるか」 講師・鍋谷堯璽（神戸ルーテル神学校）

1、第一一回CS教師研修会：四月三〇日、島田、六七名「今、なぜ教会学校なのか——生涯教育としての教会教育から考える」講師・櫛田 馨教授（ルーテル神大）

2、小鹿教会及び藤枝教会第一種教会承認（九〇年三月二一日第三七回教区総会）

第一八回 一九九一年一月四日 [三ヶ日・二九一名]

主題 「社会に生きる」 講師・新田目 建（別府平和園）

1、三ヶ日という小さな教会が中心となつての信徒大会であったが、地区宣教委の働きが精力的になされ、全ての運営がとどこおりなく行なわれた（九回に及ぶ準備会）。午後はみかん狩り、豊田佐吉記念館見学などの自由参加のプログラムがあつた。このようなプログラムは今回が初めてである。

- 2、第二二回CS教師研修会：四月二十九日、名古屋、六二名「人間成長の一翼を担う教会教育、—がんばるCS教師」 講師・賀来周一教授（ルーテル神大）
- 3、希望教会第一種教会承認（九一年三月二一日第二八回教区総会）

第一九回 一九九二年一月三日 〔名古屋・三六〇名〕 （教区長・戸田 裕）

主題 「宣教百年にむかつて——さあ出ていこう」 講師・松沢員子教授（加茂川）

- 1、八八年のオーストラリアBOFへの感謝として二七名のオーストラリアの牧師、信徒の方々をお迎えした。
- 2、三六〇名を越える出席人数となると組織、運営、会場など一層の準備が必要となる。九一年度、教区（二九教会）の朝礼拝出席者は八三一名である。信徒大会出席者が如何に多いか、また重要性を増しているかがわかる。
- 3、宣教百年の前大会と位置づけられた今大会は内海望議長、宣教百年準備委員の方々の出席を得た。また各教会旗、バナーが掲示された。
- 4、第一三回CS教師研修会：四月二十九日、ひかり、八五名「元気が出るCS」 講師・各教会の特技を持つ方々による。
- 5、焼津教会第一種教会承認（九二年三月二〇日第二九回教区総会）

【参考資料】

1、「聖霊の歩み」（編集委員：岸井 敏、鈴木 宏、ダグラス・スウェンドサイド 一九六〇年四月一日発行）

- 2、「日本福音ルーテル教会東海教区二〇年史」(著者：河島 亀三郎、一九七一年七月一日発行)
- 3、「東海教区歴史研究会報告」(教区内の自主的研究報告、協同討議者：山本 裕、重野信之、川口 誠、角田 健
一九七二年一月三日発行)
- 4、「東海教区総会報告書」(各年次)

エッセイ

研究余滴三題

坂井 信生

一、山内量平先生と私

私は『日本福音ルーテル教会百年史論集』第二号と第三号に、「山内量平評伝」と題する拙論を公にした。同論集編集の責任をとっておられるルーテル神大・徳善教授のご依頼もさることながら、拙稿の「はじめに」に記したところであるが、個人的な執筆事情も存していたからである。

私の曾祖父、祖父は、受洗こそりパード先生からであるが、佐賀在任中の山内先生に親しく薫陶を受けており、共に教会理事（今日の役員）を勤めた。祖父母の結婚式は先生の司式と伝えられている。祖母は佐賀教会での最初の結婚式と常に自慢していた。しかし、事実はそうでなく、山内直丸先生のそれが佐賀教会第一号である。一八九九年（明治三十二年）現在地の水ヶ江花房小路に会堂が新築されているので、あるいは新会堂での結婚式第一号であるのかもしれない。父は先生の博多教会赴任のための離佐直後に

誕生している。おそらく、先生が佐賀を再訪された折に、先生のあたたかい祝福をうけたことであろう。

このような「えにし」があり、しかも先生の創設になる博多教会に、私は今日つらなっている。その私が『博多ルーテル教会八〇年史』の執筆を委嘱され、さらに、先生の人となりと事業の一端を書き著すことになったのは、むしろ喜んでなすべき義務であるのみならず、何とも不思議な思いにかられるのである。

不思議な思いは、ただこれだけにとどまらない。さらに「統篇」があるのである。

去年（一九九〇年）の夏のことである。たまたま故三宅秀雄氏の遺品、とりわけ教会関係のそのの整理をお手伝いする機会があった。よく知られているように、三宅氏は長年にわたり博多教会を代表する信徒であり、昭和三〇年代に信徒運動協議会で、主導的役割を果たされた三宅氏をご記憶の方も多かろうと思う。『博多教会八〇年史』にも一節を割いて、三宅氏を「信徒運動の三宅」と呼び、氏の業績を称えたことであった（同書、一九二―一九七頁）。三宅氏の遺品の一部は博多教会に、とくに信徒運動協議会の記録書等はルーテル神大のルーテル諸派資料室に、それぞれ寄贈していただくことにした（石居正巳先生の「信徒運動協議会」——「るうてる」一九九一年一〇月号——参照の

こと)。

その折に、私には「身に余る光栄」としか表現できないご厚意が三宅家から示された。三宅氏が苦勞を重ねて蒐集されていた遺品、つまり明治初年刊行の木版刷・和綴の分冊聖書など数冊を私に、というお申出である。ブラウン、ヘボン等のいわゆる翻訳委員社中による分冊聖書をふくみ、聖書と訳史上からも実に貴重な遺品であり、返答にいささかのためらいを禁じえなかつた。しかし、最終的には有難くご厚意をお受けし、大切に保管することをお約束したのであつた。

ところが、である。その中の一冊『新約聖書馬太伝』(明治一四年刊で活版刷)の裏表紙をみて、一瞬目が疑つたのである。何と驚くことに、そこにはまぎれもなく、見慣れた山内先生の筆で、墨痕もあざやかに「田辺長老教会 七冊の内」と書かれているではないか。この時の驚きと感激とは今なお鮮明に残っている。

田辺長老教会は、先生受洗の翌年の一八八五年(明治一八年)、父祖伝来の家業である酒造業「松屋」を廃して南部から田辺に軽居、自家製の醬油を販売しながら自費伝道を試みつつ、先生を中心にして創設された教会(現日本基督教団田辺教会)である。その田辺教会が所蔵していた分冊聖書だったわけである。先生も幾度となく、まさにこの

『馬太伝』を手にしたことであろう。

どのような経緯をたどつて、この『馬太伝』が田辺教会をはなれて三宅氏の手に入ったのか、『馬太伝』は何も語つてくれない。三宅夫人によれば、戦災で焼け出された三宅氏が、戦後幾度となく各地の古書店に足を運び、蒐集されたのだという。三宅氏ご自身もまた、山内先生ゆかりの聖書を手にして喜んでおられたのかもしれない。それはともかく、その『馬太伝』が、今現在、前にのべたように、山内先生と因縁浅からぬ私の手許にある、というわけである。

この事実を単なる「偶然」として片付けていいものであろうか。『博多教会八〇年史』執筆の苦勞も、これでいっぺんに吹きとんだ思いと共に、みえざる不思議なみ手のわざをも思わざるを得ないのである。果報者の私は自分のこの分冊聖書を「家宝」として大切に保管し、いずれルーテル神大に寄贈することを願っている。

二、山内直丸先生の「福音ルーテル教会」

前項に述べたように、私は『博多ルーテル教会八〇年史』を執筆したのであるが、その際、とりわけ山内量平先生ないし初期ルーテル教会の資料を見出すために、可能な限りの文献を渉獵した。その文献の一つに『福音新報』が

ある。山内先生も一時期この発行に関係しておられたので、何かが見出せるのではないか、との期待からであった。

この『福音新報』第一〇二七号（一九一五年三月四日刊）に、私は興味ある一文を見出した。山内直丸先生執筆の「福音ルーテル教会」と題された文がそれである。

今さら、山内直丸先生の紹介でもあるまいと思うのだが、簡単にふれておこう。

直丸先生は旧姓鈴木、一八六六年（慶応二年）和歌山の生れで、一時期ギリシャ正教の信仰をもったこともあったが、量平先生と同じくJ・B・ヘールより一八八五年（明治一八年）に受洗、のちに献身を決意して明治学院神学部へと進んだ。卒業後の一九九五年（明治二八年）量平先生の招きに応じて、佐賀におけるルーテル教会の伝道陣営に加わる。翌年、量平先生の姪で養女の綾と結婚して、以後山内姓を名のことになった。熊本で伝道中の一八九九年（明治三二年）、量平先生と共に按手を受け、日本で最初のルーテル教会牧師の一人となったが、その際の試問の出来具合は素晴らしいものであったと伝えられている（『ルセラン・ヴィジター』一八九九年三月九日号）。今日の熊本におけるルーテル教会の隆盛の基礎は、実に直丸先生によって築かれたといってもよい。その後、熊本から小倉、

さらに東京に伝道し、一九一九年（大正八年）博多教会における年会で教会憲法が制定されるや、初代議長に推され、ルーテル教会全体の発展のためにも大きな足跡を残した。直丸先生は一九五六年（昭和三十一年）東京で天の召しをうけた。

この山内直丸先生の「福音ルーテル教会」は、大正初期のルーテル教会の実情を示しているのみでなく、当時のルーテル教会人の意気込みのいかに大なるかをも痛感させる。この文に表わされているすがたと、それより八〇年近く経過した今日のそれとを比較してみればよく理解されよう。文中にある九州中心の十指にも満たない教会は、今日北は北海道から南の鹿児島にいたるまで一五〇ほどを数え、八百余名位という信徒は一万余である。神学校はすでに大学令の大学となり、短大、高校をも有している。また、この文を草する時、憲法が制定された折に自らが議長に選出されようとは、直丸先生自身想像もしていなかったであろう。「小会、中会、大会」という表現は、長老派出身を示唆して興味深い。

何はともあれ、本文を読んでいただくことにしよう。読む方の立場でそれぞれ感慨あるいは所感を抱かれることであらう。一部常用漢字に改めたほかは原文のままである。

福音ルーテル教会 山内 直丸

福音ルーテル教会は聖曆一五三〇年ルーテル、メラックト一派の人々がアウグスブルグに会合して制定したる廿一條条の信条を受入るゝ新教最古の教会で、本名は福音教会なるも旧教徒の紳名してルーテル教会と呼べるを、年処の久しき遂にかく混用さるゝに至つたのである。

わが帝国に於ては明治二十六年米国ユナイテッド、シノッド伝道局が山内量平氏を聘して九州佐賀に伝道せるが最初で、次で熊本に布教した。明治三十四年丁抹伝道局が来りて久留米に教会を設けられた。それより大牟田、博多、日田、小城、直方、門司等九州の処々に主の道を宣伝へた。後米国ゼネラル、カウシル伝道局来り、以上の二局と連合して評議會を組織し東京に宣教することゝなつた。之は大正元年九月のことである。この連合伝道局に属する外国宣教師九名女教師二名本邦教師四名伝道師三名伝道婦人一名である。明治三十八年頃芬蘭土福音伝道局も亦来りて東京市外千駄ヶ谷及信州諏訪飯田等の地に布教して居る。評議會とは未だ何等の關係なきも次第に接近しつゝあれば遠からざる内に協同提携して働かるゝことゝなるであらう。外国宣教師三名女教師四名本邦教師一名伝道師四名と思ふ。而して信徒合せて僅かに八百名位である。

伝道開始以来二十余年の星霜を経るも未だ自給自営の教会なきのみならず、正式に組織して役員を選定したる教会もないから、小会中会大会もなく、唯毎年一回教役者会を開きて教会一般に関する応急の事務を処理し来りしが、近頃漸くその必要を認め一昨年憲法起草委員四名を選出して責任に当らしめた。大抵本年中に確定するであらう。然る時に初めて日本福音ルーテル教会が建設せらるゝ筈で、それ迄は純然たる海外伝道局の伝道地である。

斯の如く伝道事業の成績甚だ豊富ならざるの感あれども、茲は我教会伝道の方針万事確実を重んじ強固なる基礎の上に教会を建設せんとするが故にて、一たび或地方に伝道せんとするに当り三年間を試験期として充分の視察をなし、後始めてその伝道に必要な設備をなして天国の門戸を開くのである。されば宣教以来日猶浅しとは雖も未だ一も引上たる伝道地はなく、教役者達も亦よく其意を諒とし居るが故に大抵十年乃至十六年間一地方に定住して伝道の重任に当りつゝあり、ある教役者は自己の墳墓の地をも定めて居らるゝ有様である。

福音ルーテル教会は一般に教育を尊重して所属学校管理法を憲法に明記する程であるが、わが日本の教会には未だ学校がないが、佐賀、小城、博多、久留米、飯田等の地には幼稚園を設け教会附属として経営しつゝあるが、何れも

其地方に歓迎されて、四十名乃至百余名の園児を收容して居る。是等の幼稚園が次第に発展して終に小学校か又は高等女学校を増設せらるゝに至るであらう。吾人はかく希望して居る。

幼稚園なき熊本にては明治四十三年市外大江村に一万二千坪許の敷地を求めて中学校を設け名を九州学院と命じ、翌年三月百二十名の学生を集めて業を始めた。これ九州に於る最多額の費用と労力とを費して設けたる中学校の一にて、大正二年徴兵猶予の特典を与へられた。当時第四学年級まで、四百名の健児集つて学んで居らるゝ。本年第五学年級完成を待つて高等学校との連絡及び普通文官登用に關する特別指定を申請する筈である。遠山參良氏学院長としてブラウン博士を主事として専ら當つて居らるゝ。遠山氏は前に等五高等学校英語主任教授たりし方にて、今も教師玉置理学士と共に第五高等学校講師を兼任しつゝあるは学院の各譽とする所である。

九州学院神学部は明治四十三年専門学校程度に準じて創立せるものにて当時本科九名予科五、六名の学生が学んで居る。後來私立高等学校令が發布さるゝ時に九州学院に高等学校を併置し、神学部は大学令に依りて改善したしとは本来の希望である。遠からざる内にこの希望が適へらるゝであらう。この外米國大学と東京神学社神学校に学ばるゝ

学生各一名あり。

東京には聴声学舎なる学生寄宿舎が教会内に併置して帝國大学生等十数名を世話して居る。近き將來に千余坪の地所を本郷辺に買入て百名許の学生を收容し得べき寄宿舎を建設すべく當時計画中である。

以上は今日までの状態であるが、本年内に一兩名の新宣教師も来り、九州東京間の何れにか一、二ヶ所の新伝道地も定めらるゝ筈である。大阪、各古屋、下の関の内より選ばるゝであらう。

わが福音ルーテル教会の組織に付ては使徒信經ニケヤ信經を受入て居るが殊更に前記アウクスブルグ信條を受入て居ることと、ルーテルの著せる小教理問答を日旺学校教科書として用ゐることが特色である。けれ共それよりも新旧約聖書を絶対的に神の聖語として信奉し一言一句と輕忽にしない。如何なる信條も教科書も聖書に違背すれば寸毫の仮借なく改竄するのが最大特色である。教会政治は新教改革派諸教会の政治振りが各特色ある如くルーテル派にも種々ありて一定せない。独逸、丁株、瑞典、那威の如き國定宗教とされた国々では裏に監督政治で或者は代議政体で又極端なる自由制度の者もある。わが日本教会が如何なる制度を取て政体を組織すべき乎に付ては未だ何人も考へて居ない。唯日本國民の氣風に適する者を選びたいとの希望

のみである。大抵本当の憲法制定の時に確定するであらう。

三、翻訳協力者犬塚義信考

私が住んでいるところは「太宰府」である。ところが、「大宰府」と記せば、かつての遠の朝廷みかど、西国九州の政庁都府樓のことである。この例のように、「てん」のあるなしによって、意味が大きく異なってくる場合がよくある。洒落ではないが、「てん」で話が違うのである。以下はこの「てん」のあるなしにかかわる話である。

一八九二年（明治二五年）に來日した米国南部一致ルーテル教会宣教師シェラーとピーリーの両先生は、翌九三年四月二日イースターの夕、佐賀でルーテル教会最初の礼拝を行った。この日が日本福音ルーテル教会誕生の日であることはよく知られているところである。

いたって保守的であり、「耶穌教の蔓延防止」に懸命となっていた佐賀の町での困難な伝道の最中、とくにピーリー先生はルーテル教会の礼拝式文の翻訳に従事していた。この年の七月九日に、ルーテル教会最初の聖餐式が執行されているが、この折に早くも、翻訳作業を続けていた『共同礼拝式』(Common Service)の聖餐式の部分を「手書き」(manuscript)のまま使用したという（『ルセラシヤ』）

ヴィジター』一八九四年三月一日号)。また、一八九四年三月四日付のピーリー書簡では『共同礼拝式』の翻訳完成が間近のことを示唆している(同、五月一〇日号)。

もちろん、ピーリー先生ははまだ日本語に充分熟達しておらず、独力でこんなに短期間で翻訳を完成することは到底不可能であった。とすれば、一体誰が翻訳協力者であったのであろうか。山内量平先生はかれらの日本語教師であったとはいえ、英語をほとんど理解できなかったようである。この時には、前項に記した鈴木(のちの山内)直丸先生は未だ佐賀に着任していないので、その可能性も考えられない。しかもピーリー先生はこの協力者を「日本学者」(a Japanese scholar)とのみ記し、その固有名詞を語っていない(同、一八九七年七月二二日号)のは何とも残念なことである。

ところで、従来この式文翻訳協力者として、犬塚義信の名があげられている。一八九七年(明治三〇年)六月四日発行のルーテル教会式文『礼拝式』の奥付に「合訳 アール、ビー、ピーリ/犬塚義信」とあるのが唯一の根拠である。これに対して、私は必ずしも一〇〇パーセントの確信をもって主張するほどの資料を見出したわけではないが、犬塚義信ではなく、犬塚義信と特定してもほぼ間違いはあるまいと考えている。先にのべた「てん」のあるなしの違

いである。犬塚義信を翻訳協力者と推定する理由（それはまた犬塚なる人物の紹介にもなるが）を、以下にのべていくことにしよう。

そもそも、式文の翻訳作業に協力するとなれば、いくつかの条件が必要なのは当然のことであろう。もちろん、英語能力は欠かせないし、キリスト教的知識にもかなり精通していなければならない。また、佐賀に関係する者であることも必要であろう。犬塚義信はこれらの条件を満たしている人である。

私は『博多ルーテル教会八〇年史』を執筆するに当り、何冊かの日本キリスト教（会）史を通読した。その際に、長崎が日本プロテスタント史上きわめて重要な地位を占めている事実を知り、地の利もあつて、明治初期長崎のプロテスタント史の研究（というは大袈裟だが）を文部省の科学研究費を得て試みた。その成果の一部は早稲田大学で開催の日本宗教学会一九九一年度大会で発表した。この研究のプロセスの中で、私は犬塚義信の名とめぐり会ったのである。すなわち、聖公会長崎聖三一教会が所蔵する初期宣教師の、派遣母体である英国教会宣教師協会（Church Missionary Society）への年次報告書、私信その他に、しばしば犬塚（Inutsuka）の名が出てくるし、また『長崎聖公会略史』にも幾度となく登場してくるからである。

それでは、犬塚義信とはどのような人物なのであるのか。

CMS宣教師モンドレル（Herbert Maundrell）の一八七五年（明治八年）九月一二日の日記に、はじめて犬塚のことが記されている。「夕拝で私はイヌツカに洗礼を授けた。……かれは過去数ヶ月聖書の勉強をしてきたし、一ヶ月の間洗礼準備教育を授けた。……かれは佐賀の人で、長崎で洗礼をうけることを心配していた。おそらく、佐賀に帰ることになるだろうからである。かれは素敵な若者である。……今日から、かれはヨハネとキリスト教名で呼ばれる」と。さらに、一八七七年（明治一〇年）一月三日付の年次報告書では「イヌツカは長崎の主たるアカデミーの英学校（Yei-Gakko）の学生で、キリスト者となったことで、仲間の学生から多くの嘲けりや非難に耐えなければならなかった。しかし、かれはかなりの決断力を有する若者でしっかりしていた。洗礼時より、かれはキリスト教の聖職者となる考えをもっていた。昨日かれは英学校を退学して、私について神学を学ぶべきかどうか相談にきた。かれは一九歳である」と。

これらの記事から推定すると、犬塚は一八五九年（安政六年）前後に、佐賀で生まれていることになる。英学校とはかつての幕府洋学所（のちに広運館と改称）で、当時は

長崎英語学校と呼ばれていた学校のことであろう。長崎英語学校は一八七七年（明治一〇年）に廃校となり、長崎県に移管されることになる。モンドレルが「長崎の官立学校（Government College）が閉鎖され、ヨハネ・イヌツカはその学生であったが、佐賀に戻された」ことを記している（同年一月二日付年次報告書）が、このことから犬塚は長崎英語学校の学生であったと考えられる。とすれば、当然、かれは佐賀藩の有力家臣の出自であり、おそらく、藩命ならぬ県命で長崎に英学を学んでいたのである。のちに、犬塚を伴って佐賀伝道の旅をした折のことを、モンドレルは「イヌツカは若いとはいえ、自らがきわめて価値ある人物であることを示した。かれは自国（佐賀）の人々の間ではかなりの社会的地位を有しており、かれはそれを真理を促進するのに用いようとしている。佐賀での開教が確保されたのは主としてかれを通してであった」（一八八〇年一月五日付年次報告書）と記していることから、佐賀藩重臣の系をうかがわせる。犬塚は英語学校廃校後、二年近く佐賀に帰っているが、右の記事から推察すれば、佐賀で役所か学校に勤務しながら伝道活動をしていたのではないか、と思われる。

他方、モンドレルは日本人伝道者養成の必要性を痛感し、のちに聖アンデレ神学校と呼ばれるようになる神学予

備クラス（Preparandi Class）を、一八七七年（明治一〇年）自宅に開設した。ちなみに、この第一期入学生のの中に、佐賀出身の洪恒太郎がふくまれているが、洪師はのちに福岡聖公会アルパ教会司祭となり、博多教会在任中の山内量平先生と親交を結んでいる。一九〇六年（明治三九年）博多教会最初のクリスマスには、列席した来賓の中にその名を連ねている。

約二年後の一八七九年（明治一二年）一月、洪たちが、佐賀に戻されていた犬塚を伴って予備クラスに来た時のことを、モンドレルは喜びをもって次のように記している。

「神学予備クラスの学生がクリスマス休暇から帰ってきた。かれらはヨハネ・イヌツカを伴って帰ってきた。イヌツカは過ぐる一八ヶ月家の事情で佐賀に帰っていたが、今や自由となって予備クラスに入るために来たのだ。……かくて、われわれは五名の学生をもつことになった」と（一八七九年一月二七日付年次報告書）。かくして、すでに英学を身につけていた犬塚は、今や洪らと共に神学を学び、伝道界に投じることとなったのである。

モンドレルの教育方針は神学を学ぶと同時に実地伝道をも義務としていた。先にもふれたように、かれは犬塚を伴い佐賀方面に伝道旅行に出かけている。その後も犬塚は二度佐賀伝道に従事している。一八八〇年（明治一三年）か

れは熊本に赴き、一年余伝道に励み聖公会熊本聖三一教会の基礎を築き（『日本聖公会九州教区史』二二二頁）、再び長崎で神学の研鑽をつんだ。一八八四年（明治一七年）聖アンデレ神学校は大阪の聖三一神学校に吸収合併されることになるが、洪ら転校学生の中に犬塚の名は見当らない。かれは長崎に留まり、佐賀、筑後、熊本、島原などに派遣され伝道活動に従事していたことが知られている（『長崎聖公会略史統篇』）。

一八八七年（明治二〇年）頃から、犬塚に関する記録は次第に少なくなる。『聖公会要覧』にしても、一八九一年（明治二四年）版には熊本教会欄に犬塚の名をみるが、その後はなく、再び犬塚の名が登場するのは一八九五年（明治二八年）度のみであり、佐賀市水ヶ江町の聖公会講義所を担当している。しかしながら、この年を境にして、犬塚義信の名は『要覧』からばつたりとすがたを消してしまうのである。

『要覧』をみる限り、犬塚の消息は二四年の熊本以降、二八年の佐賀までと、その後はまったく判明しない。しかも、二八年度の『要覧』によると、佐賀片田江の教会ではなく講義所の担当であり、信徒数にしても片田江教会二八に対して、講義所の方は空欄となっている。どうやら、この時期の犬塚は体調を悪くしてか、熊本から郷里の佐賀に

帰り、静養かたがた新来のルーテル教会宣教師の翻訳を手伝っていたのではないかと推察される。犬塚こそ、英語がかなり出来かつキリスト教的知識にも精通しており、おそらく佐賀在住者の中で翻訳協力者としての条件をみたく最適の人物といえよう。

最後に今一つ、聖公会のヨハネ犬塚義信を式文翻訳協力者と推定する根拠をあげておこう。『百年史論集』第一号に、前田貞一先生が「礼拝式文史」と題する論文を執筆しておられる。この論文の中で、明治三〇年発行の犬塚の名が記されている『礼拝式』の翻訳に際して「聖書以外の底本資料としたものは聖公会祈祷書であつたと考えられる」とし、日本語表記に同文および類似点の多くあることが指摘されている（四一頁）。もし、長年聖公会祈祷書に親しみ、聖公会的表現法に慣れていたヨハネ犬塚が協力者であるとすれば、「聖公会祈祷書の影響は大きい」といわれる前田先生の指摘は、当然のことであり、実在的をえたものといわなければならない。

以上、犬塚義信について現在の段階で判明した限りの事実をあげたが、これらの諸事実から推察しても、ピーリー先生の翻訳協力者は犬塚義信ではなくて、ヨハネ犬塚義信であると断定してもいいのではないかと思う。この「てん」のあるなしは多分誤植であろう。大騒ぎをして資料を

あさり歩いた果ての結論は、どうやら「誤植」に落着きそうである。しかしながら、何故か、それ以降のヨハネ犬塚義信の消息は杳として知ることができない。

編者注 坂井氏のエッセイをいただいたころ、幻とされてきた最初の「るうてる」、すなわち、「路帖教報」が江口武憲牧師の手許に所蔵されていることがわかった（「るうてる」一九九一年二月号）。この貴重な原本からマイクロフィッシュとコピーを作らせていただいたが、それを読んでいるうちに「犬塚義信」の名に出会った（『路帖教報』一九〇一（明三四）年三月一四日号）。コピーを早速坂井氏に送ったのはもちろんである。その記事は

佐賀日本基督教会の近状

同教会は目下無牧の上に会員中危篤の病者多くありと聞きて常に痛心する所なるが、去る三月五日九州の布教上に貢献する所多かりし長老犬塚義信氏は宿痾革りて四十六歳を一期として永眠せり。寔に痛悼の至なり。依て翌六日午后四時會堂にて小林三郎氏の司式、山内量平氏の聖書朗読、ピーリ博士の祈祷、小林氏の犬塚氏の略歴を朗読に続ひて留川一路氏の説教によりて葬式を執行し、ウインテル教師の祝福を以て終り、莊嚴なる函簿に守られて墓所に送られたり。

とある。犬塚義信の最後の消息である。

（編者）

エッセイ

ルーテル教会に対する三つの感謝

加藤 亮一

わたしは昭和四年四月七日久留米ルーテル教会で岸 千 年先生から洗礼を受け、昭和一一年にルーテル神学校を卒業、その後約五〇年間日本基督教団の教職として、伝道牧会のおわりに奉仕させていただいて来た。

わたしはルーテル教会で受洗し、ルーテル神学校を卒業した、いわゆる「ルーテル育ち」として、次の三つのことをルーテル教会に感謝申し上げたい。

第一は敬虔主義信仰を身につけさせていただいたことである。

わたしは、よく日本基督教団の牧師方から「貴方は敬虔派の教会で育ちましたネ」と言はれて来た。はじめのうち、わたしは「貴方は福音主義の教会で育ちましたネ、元の教派はどちらでしたか」と尋ねられるなら、当然のこととして納得ができたが、この敬虔主義という言葉に多少の抵抗を感じ、むしろ不本意であったが、しかし今ではこの

「敬虔主義」という言葉に心から感謝をしている。

それはルーテル神学校に入学する前の約二年間、わたしはウインテル先生の伝道の助手として、先生の身近かで親しく信仰の訓練をうけた。ウインテル先生はルター神学を深く研鑽された神学者で又伝道熱心な宣教師であったが、その一面北欧ルーテル教会の敬虔主義を豊かに身につけられておられた。

わたしは二年間の伝道助手としての生活とその後の先生からのお導きを通して「謙遜と反省、瞑想と祈禱」という、すばらしい敬虔主義信仰を無言のうちに、確かりとウインテル先生から教え込まれたことを深く感謝したい。

わたしは自分の伝道・牧会の心得として六〇才までは教会の青年方に対して「君」呼ばわりをしないで「○○さん」と「さん」をつけて呼んで来たが、こういうこともウインテル先生から、言わず、語らずのうちに学んだ尊厳敬虔主義の影響であると思う。

第二は、日本基督教団信仰告白制定の時期のことである。

わたしは第五回教団総会（一九四八年）から第七回教団総会まで三期六年間、教団三役の一つである教団総会書記を務めた。この任期中の最重要案件は、現行の信仰告白の

制定であった。何分にも三十数教派の合同教会の信仰告白の制定であったため、毎総会で大変な論議が重ねられた。この唯中で同じ「ルーテル育ち」の北森嘉蔵先生は、信仰告白制定委員会の書記とし、原案起草者の一人として大きな貢献をされた。わたしは又常議員会、常任常議員会、総会の各書記として、教団の行政面から北森先生と相呼応して、この信仰告白制定に微力をささげることができた。これもルーテル神学校で学んだ信条字や信仰告白の賜物として衷心から感謝をしている。

第三はインドネシア教会指導者方との深い交流である。同国のプロテスタントの信徒は約一千万、そのうち七〇パーセントはオランダ改革派系で、二五パーセントがルーテル系（バタック教会）で、それぞれ三五〇年又は一五〇年の歴史を持つ有力な教会である。

わたしは四年に一回開催される同国の全国キリスト教大会には毎回招待をうけ、必ず出席して来たが、この教会指導者方とは、すでに四〇年以上の緊密な主在る交わりを続けて来た。

その大きな理由は、わたしはルーテル教会出身の教職であるということであると思う。ルーテル系のバタック教会の指導者方は申すまでもなく、オランダ改革派系の教会指

導者方も、信仰告白を重じ、聖書中心の福音主義信仰の共通した神学的基盤に立っているものとして、非常な親近感を持つて下さるからではなからうか。このようにインドネシア教会指導者方との恵まれた国際交流の場を与えられて来たことも「ルーテル育ち」のためであることを思い、ルーテル教会に深甚の謝意を表したい。

（一九九一年一月二三日）

エッセイ

牧師と歩んだ軌跡

間垣和恵

今年我真珠湾攻撃から五〇周年になり、新聞、テレビは当時の様子を克明に示して、当時明らかにされなかったことどもが、今新たにされた。この悲しい出来事はどちらにとつても不幸であつたことには間違いない事実なのである。

私は当時二〇才を少し過ぎた頃であつた。キリスト教は外国の異質の宗教との思いが日本人殆どの考えであつた。戦争はキリスト教徒に日増しに弾圧を加え、教会の礼拝中も警察から特別の係の人が終始監視していて、少しでも国の權威をそこなう言論がなされないかと見守つていた。少しのことでも連行されたのであつた。それでも教会での礼拝は肩をすばめながらも、熱心な信徒によつて続けられた。

私はその時、自分の意志で牧師と結婚しようと心に決めた。一生教会と離れたくなかつたからであつた。しかし父は、温室育ちの私にはこの激しい迫害の時とつとまら

ないと大反対した。悲しみをこめた父の表情を見ても、私の心は不思議に冷静になり意志を変えなかつた。父は遂にあきらめた。あなたの思う通りになさいと。私は別に定めた人がいたわけではなかつた。私にとつて一番先に現れたのが、一面識もない、ルーテル教会の本田先生のお申出で初めて会つた主人であつた。はじめて知つた未知の教派であつたが、迷ふことなくこの牧師の後をついて歩む決心がついた。この人は教会を捨てることはしないだろうと思えたからである。

二〇年余育ててくれた教会と異つた新鮮味と好奇心も手伝い、小石川高田老松町にあつた平屋建の民家での盲人伝道所の一員に加わることになつた。私を他ににして、みんなは点字の式文を用いていたし、式文など使つたことのない私は少し面くらつたが、どの人も明るくその雰囲気には驚くばかり、すぐ溶け込むことができて、楽しい交りを持つたが、戦争は日毎に激しさを増し、東京が戦場となつてきたとき、一日も早く身体の不自由な人、子供、年寄りが東京を離れるように国の命令が出て、教会の方々はひとり、ふたりと全員疎開し、礼拝は語る牧師、聞く私と二人の礼拝が続いた。しかし今度は道路を広くしなければと、家屋がこわされはじめ、教会もその線内に入り、遂に私たちは教会をも一時失つてしまつた。

やがて終戦を迎え、宗教の自由を国が認める時代へと変わり、待ちに待った教会への任命がおりた。うれしくて主人と手を取り合つて喜んだ。それが佐賀教会であつた。私は九州は初めてであり、主人も佐賀には一度も行ったことのないとのことであつた。

戦後の余韻がまだ残り、人々も町々も落着かなかつた。どの教会も立直るまでに日時が必要だつた。

赴任して二年を過ぎた頃、東京の本部から、会堂・幼稚園・牧師館の建直しを言つてきた。費用は米国のルーテル教会本部の御厚意によるが、佐賀教会でも応分の負担をするようにと目標額を示された。早速役員会が開かれたが、貧しい教会では額が大き過ぎると鈍つた。教会での臨時総会で先ず、牧師自らが一ヶ月の俸給全額献金を申し出た。と続いて一番弱者と誰もが思つていた年老いたおばあちゃんが「私も貧者の一灯を」お捧げしたいと申し出た。教会の空気が一変した。役員も会員も一致して頑張ろうと決起したのだつた。

やがて建築は順を追つてはじまつた。今考えればそれはお粗末な材料であつたに違いないのだが、当時の私たちにはまばゆいばかりの建物に見え、息をのむ思いで出来上つてゆくのを眺めていた。

新しい会堂は活気にみち、礼拝には日曜毎に出席者が増

し、活動も盛んになつた。日曜日の分級には牧師館も台所を除き全部使われた。あの教会に行つてゐる子供たちは優秀だとの評判までがどこからともなく伝えられて行つた。

色々な大きな会合も佐賀ですることが多くなり、牧師先生方のお泊りも多く、信徒も各家庭を宿に分泊したこともあつた。訪ねて来る方々も多いので幼稚園の先生方は「牧師夫人は旅館のおかみさんみたいね」と言つていたが、牧師はかねて「教会を訪ねてくる人々にはいつも大切に、親切にしてくれとの言葉に忠実に従つてゐるだけのことであつた。教会は盛んになつても牧師の台所は相変わらず火の車であつたが、少しも気にならなかつた。教会が活気づいてゐるのを見ている喜びの方が大きかつた。私は無理してゐるのではなかつた。むしろ自分の性格に一番合つた道に歩めたことを喜んで生活してゐた。

六年目に入り教会は六十周年の記念礼拝がもたれ、米国から議長はじめ偉い方々が出席することになり、東京からも常議員の先生方を交通費佐賀教会持ちでお招きしたので驚いておられた。そして出席者全員に美しい有田焼の折鶴模様の小さな蓋物ふたものが配られ、来賓の方々には美しい花模様の花びんであつた。役員はじめ係の方々への気配りに頭が下がる思いだつた。当日会堂は一杯の人々で、私は玄関の前に立ち、中から聞える讚美歌、式次第の流れに身を置きな

がら涙がとめどなく溢れてきた。うれし涙である。無から有を生み出す神の憐みの業が、不可能と思っていた教会員の全身全霊の一致した働きと祈りに、こゝろ応えてくださったのだ。この神の恩寵の業をまさしく受けとめることができたのだ。感激の涙は止るところを知らなかった。

献堂が無事に終りを告げた時、支拂うべき金額も完全に拂い終り、日夜心も体も痛めつくしていた牧師も久しぶりに明るい笑顔に戻り、私は心からご苦勞様でしたと頭うなづを下げた。

やがて本部から、次の任地へ行く命令が出た。様々な喜びも苦しみも共にした愛する佐賀の方々と別れる時がきた。精一杯働くことの出来た爽やかな心で次の任地でも頑張ろうと元気が湧いてきた。

あれから四十年、牧師との二人三脚の旅は続いた。それは一本の道ではなかった。少し遠廻りになり、神大で新約専攻の教師になったが、いくつかの教会にお手伝いする機会に恵まれ、大好きな教会の交わりに私までが出かけて行き、信仰の友が大勢与えられた。離れても折りにふれ、信仰の道を歩み続けておられることを知るときは、牧師夫婦の最高の幸せのひとつでもある。

六年いた佐賀からは、石居先生、吉田先生、野田先生と、立派に主人の後を継いで堅実な歩みを果たしておられ

ることは誇りに思える。また米国で牧師をしておられる高塚先生は、主人の死を知るとすぐ「先生の播いて下さった種は無駄にはしません」と言い切って下さった。二十数年前新町伝道所で奉仕したとき、彼は高校生であった。

今、四十数年に互って牧師の後を歩ませてもらった私の貴重な旅は終りを告げた。振り返ると戦争のおかげで牧師と共に歩むことができ、また平和であったら知らずに終った苦のルーテル教会の一員となることができたことを、神様のなさることの不思議な摂理と思ひ合せ、悔いのない歩みを感じしつゝ残された道を今ひとりで歩き出した。

今百年記念の年を目前にして多くの方々の労と祈りがなされているとき、亡き主人に思いをはせながら、あの佐賀で味わった無から有を生み出して下さった神の奇蹟の業が再び起こるように、この百年記念がルーテル教会の再出発点となるように、神に祈らずにはいられない。

(一九九一年二月七日)

あとがき

一年余の時間が経ってしまったが、ここによくやく第六号をお送りする。その間、なにもしていなかったわけではない。宣教百年記念事業室と共同で、昨年七月二日から二四日、八王子の大学セミナーハウスで「百年史シンポジウム」を開催した。取り上げたテーマ群は四つ。「宣教方策」、「信徒運動」、「教団合同と離脱・戦争責任」、「宣教師の役割」であった。発題と討論の活発なシンポジウムであったが、発題者は討論を受けて、文章にまとめ、これをそれぞれ特集して、この論集に順次掲載していくこととした。ようやく「信徒運動」についての、三つの発題が揃ったので、いただいていたいくつかのエッセイとともに、第六号としてここにお届けするものである。上述の各テーマについても、原稿がまとまり次第、つづけて発行していく予定である。

エッセイについてご説明しておかなくてはならない。坂井氏は先に、第二号と第三号に「山内量平評伝」を書かれたが、その延長線上にも位置する、三つの小テーマで「研究余滴」をいただいた。加藤亮一牧師は、戦後北森嘉蔵教授とともに教団に残られた方で、戦後ずっとインドネシアとの友好に心と労を尽くされた。この論集を楽しみに読んでくださったので、一文を寄せてくださったものである。エッセイ末の日付が残ったが、そのすぐ後一二月二五日に逝去されて、恐らくこれが絶筆となった。ルーテル教会に寄せる思いを心に留めたく思う。間垣和恵夫人の原稿は、もともと百年記念のために東教区が編集中の証言集のために書かれたものだが、その企画には長文だし、内容も論集のエッセイに適していると思われたので、ご相談のうえ、こちらにいただいたものである。亡くなられた間垣洋助教授をも偲ぶよすがとしたい。

百年記念の年である。歴史を学び、歴史から学びながら、感謝と反省と決意とをもって、宣教第二世紀に向かつての歩みを共に始めたいものである。

日本福音ルーテル教会百年史論集 第6号

1993年3月20日発行

定価 1000円
(本体 970円)

発行者 内海 望

発行所 日本福音ルーテル教会 162 東京都新宿区市谷砂土原町1-1

編集者 日本福音ルーテル教会百年史委員会

印刷所 精文堂印刷株式会社

『百年史論集・第1号』A5判 104ページ 定価1000円(税込)

内容「日本における都市伝道について」隅谷三喜男

「アメリカのルーテル教会 日本伝道開始のころ」徳善義和

「礼拝式文史」前田貞一

「エッセイ・隣人にキリストを」西 恵三

「日本福音ルーテル教会と社会問題との関わり」古財克成

『百年史論集・第2号』A5判 96ページ 定価1000円(税込)

内容「アメリカ・ルーテル教会の世界伝道」(その1) ヴィクナー

「山内量平評伝」(その1) 坂井信生

「座談会・教会建築の歴史と現代」(その1)

「エッセイ・初めに言があった」西 恵三

「書評・博多ルーテル教会80年史」白川 清

「日本のルーテル教会の歴史叙述」徳善義和

『百年史論集・第3号』A5判 100ページ 定価1000円(税込)

内容「アメリカ・ルーテル教会の世界伝道」(その2) ヴィクナー

「山内量平評伝」(その2) 坂井信生

「座談会・教会建築の歴史と現代」(その2)

「エッセイ・青年・学生伝道」西 恵三

『百年史論集・第4号』A5判 94ページ 定価1000円(税込)

内容「わが教会の文書伝道のあゆみ」青山四郎

「エッセイ・岸先生と私」中尾忠雄

「日本福音ルーテル教会のディアコニアの歴史と働き」門脇聖子

『百年史論集・第5号』A5判 102ページ 定価1000円(税込)

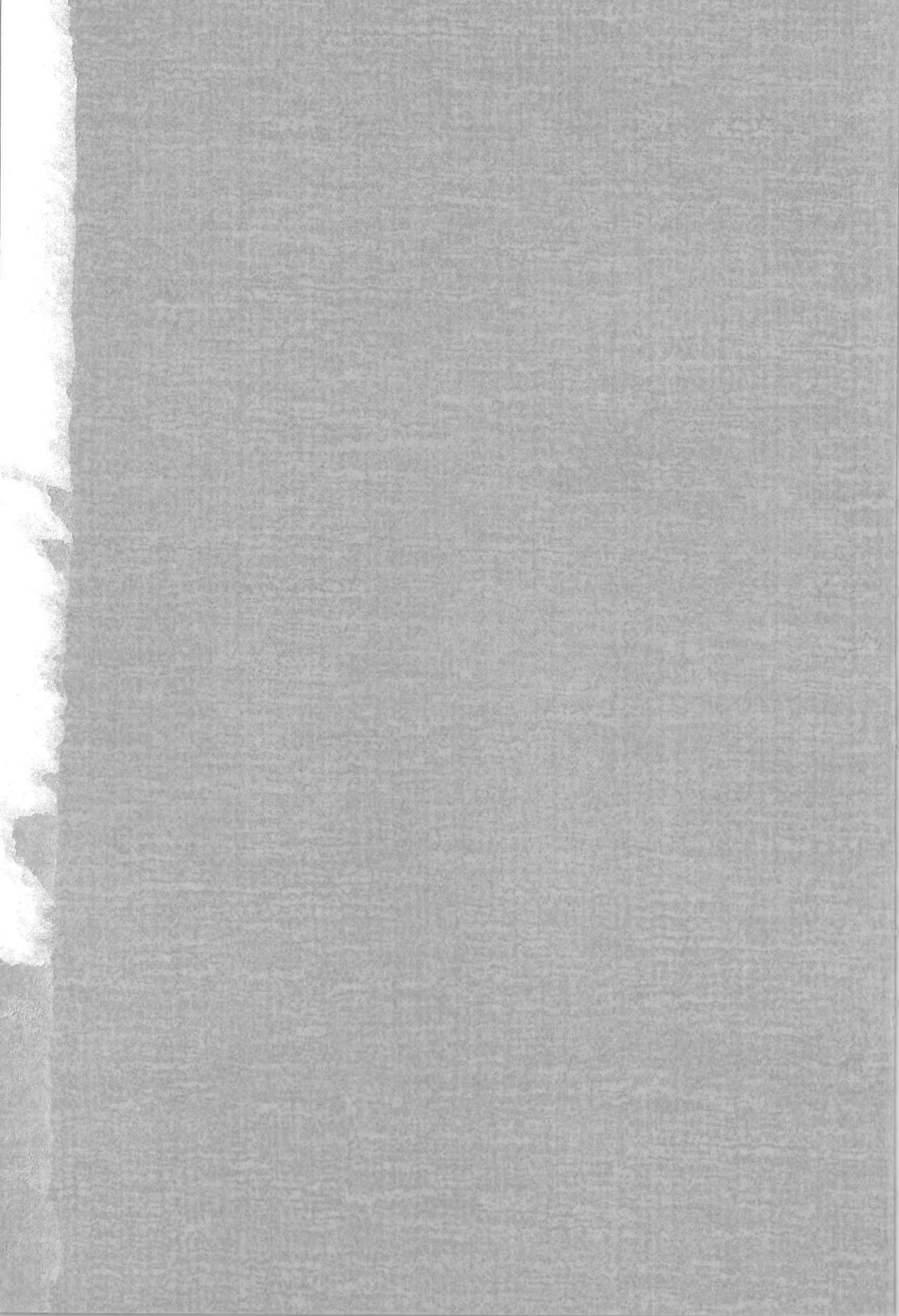
内容「復活日考-戦時中のイースター」西 恵三

「初期ミッションボードと最初の宣教師たち」徳和義和

「座談会・戦後のルーテル教会(その1)~第二次大戦から戦後にかけて~」

「エッセイ・自立教会の誕生の歴史に関して」宝珠山幸郎

「日本福音ルーテル教会の日本基督教団参加と離脱の経緯」石居正己





定価 1000 円 (本体 970 円)